

千葉県における

弥生時代後期土器の地域性について

小 高 春 雄

## 目 次

|                                      |     |
|--------------------------------------|-----|
| 1. はじめに .....                        | 157 |
| 2. 本県の後期弥生土器に地域性はあるのかー過去の研究からー ..... | 157 |
| 3. 県内各郡の概要 .....                     | 160 |
| 4. 南北両系統土器の地域的な流れ .....              | 189 |
| 5. まとめ .....                         | 192 |

## 1. はじめに

本県における弥生時代の土器様相、なかでも後期における土器様相は従来、杉原編年によりほとんど矛盾なく説明されてきた。そしてそのような状況は少なくとも約10年程前まで続いていたといつてよい。確かに、菊池義次氏の問題提起もあったが(菊池 1954、1961)、それも以後大きく発展することもなかったのである。

一方、東京湾を隔てた東京都また神奈川県では、昭和50年代に至って従来の編年観にたいする疑問が続出するようになった。つまり、概説本でおなじみの、「久ヶ原-弥生町-前野町」という南関東後期弥生土器の編年が見直されることになったのである。本県の研究者が後期弥生土器にたいして新たな認識をもって臨んだのは、事実関東西南部におけるこのような動きを受けてのことであった。

それでは、なぜ本県の研究者から同様の疑問が生じなかったのであろうか。これは調査された遺跡また報告事例の相対的な比較からして、不可思議とさえ思われよう。それを単なる解釈の相違また一つの地域性とみるか、はたまた研究者の怠慢とみるかは意見のわかれるところであろう。いずれにせよ、弥生時代後期という時期は土器の大きな流れからいって、斉一的な土師器に統一される前段階に相当する。そこに従来の地域差を越えた動きと流れがあったことは十分に予想できよう。本稿は個別千葉県における後期弥生土器のこのような過去の研究史を踏まえたうえで、南関東東部に位置する本県の該期土器について検討するものである。

## 2. 本県の後期弥生土器に地域性はあるのか—過去の研究から—

問題解決の第一歩は、本県の後期弥生土器に地域性はあるのか、もしあるとすればそれは従来の編年観とどう関わってくるか、に尽きるであろう。なぜなら、従来の編年で割り切れないような土器群が地域的に存在するとすれば、それは単なる地域性の問題で終わってしまうからである。まず南関東系からみていこう。

既に昭和29年、菊池義次氏は安房鋸南町田子台遺跡の報告において、出土弥生土器を分析した結果、「所謂「久ヶ原式」期乃至「弥生町式」期なる既成概念への疑問」を明らかにし、「同一時期内に於ける地域的変異の問題は、その一端にふれ得るには至ったが地域的変差として断定し得るにはなお資料不足を感ずる」として、その解決を将来に委ねている。

残念なことに菊池氏の疑問がその後生かされる機会はほとんどなかったが、昭和50年代の半ばから後半にかけていくつかの注目すべき見解があらわれた。まず、柿沼修平氏は市原市土宇遺跡の報告において、「本地点を含めた房総地方においては、台付甕の存在は、むしろ客体的な

存在であり、一中略一房総型の土器分布圏をなすとも言える」と述べたうえで、今後は「久ヶ原式土器、弥生町式土器の推移・把握の問題」を提起しており（柿沼 1979）、この点はその後もかわらない（柿沼 1984）。

柿沼氏の指摘をより具体的に示したのは比田井克人氏である（比田井 1981）。主に甕のあり方から指摘されたその地域性は今日においても現実のものである。一方、比田井氏の甕の分析を基に壺の分析に及んだ石坂氏は、東京湾西岸～千葉県にかけての地は沈線区画の有無等従来の基準が通用せず、かなり複雑な流れがあるとす（石坂 1984）。ではどうしたらよいか。その一つの答えが、大村直・菊池健一氏の提言である。

昭和59年、両氏は「従来の編年は具体的に機能していない」として、明確な目的意識のもとに、房総の後期弥生土器編年に一石を投じている（大村・菊池 1984）。両氏は「久ヶ原式・弥生町式の様式的連続性を否定」し、新たに久ヶ原式－鴨居上ノ台式という型式的な流れを設定した。主に昭和50年代の当時における最新の資料をもとにした分析はやはり一線を画するものといえよう。但し、両氏も（予報）とことわっているように、その論点は「基本的な認識を概略し」たものであり、具体的な地域的偏差の深化については後日に託されたともいえる。

大村・菊池両氏の考えは、実はそれ以前から続出していた問題点を房総にもちこんだものといってもよいが、このような動きにまったく批判がなかったわけではない。笹森紀巳子氏はその代表（笹森 1984、1985）といってもよいが、杉原編年の問題点を指摘した上で、壺形土器の文様を系統的に整理したその編年観（久ヶ原Ⅰ式－久ヶ原Ⅱ式－弥生町式）には当然のことながら賛否両論がよせられることになった。氏の手法はどちらかといえば個々の壺形土器の文様系列による編年観といってもよいが、その結果、「大宮台地には、久ヶ原式は現在のところ存在しない」という問題点も生じている。氏はそれを「極端な過疎現象」という言葉で解決するが、地域の実態に即した様々な編年作業が行われていることも挙げておきたい（小川 1975、小出 1986、1987、西口 1991）。

翌年、安房健田遺跡の調査成果から後期土器編年についての疑問が投げかけられている。小金井靖氏は、安房地方では久ヶ原式土器が「当地方の後期土器の初源から基本的な型式として存在し、以後、各種の文様要素を採用し、久ヶ原式の系統の中で、古墳時代へと連続と変化していく」（小金井 1985）とした。小金井氏の考えは林原氏によっても基本的に追認された（林原 1988）。

近年は甕の地域性について二つの重要な分析があった。池田治氏は資料の多い本県南西部を上総地方と安房地方に分け、それぞれ「ナデ・ヘラナデ調整の平底甕」主体地域、「ナデ・ヘラナデ調整台付甕」地域とし、「輪積痕装飾」の推移過程にも再考を促している（池田 1991）。松本完氏は、「東京湾東岸の南半、海浜部」は平底のいわゆる輪積甕分布地域、それと北関東系

土器の分布地域を除く本県は同じく平底で筆者のいう複合口縁また有段甕の分布地域であるとした。ここにおいて、南関東における本県の甕の位置付けも明らかになった感がある(松本 1993)。

ところで、柿沼氏を除けばこのような新しい提言を行ったのはいずれも県外それも東京・神奈川に生活基盤をもった人達であった。これはこの問題の本質を端的に示していよう。

ともあれ、本県では後期弥生土器の編年について、上記のような新しい動きに積極的に同調する意見こそ少なかったものの、肯定する反論もみられず、現在は模様ながめといった状態である。これは近年刊行された多くの報告書が何よりも雄弁に物語っている。

一方、下総及び太平洋岸のほとんどの地域についてはいわゆる北関東系土器との関係もあつてか未だ十分な比較・検討がなされなかった。僅かに近年、加藤修司氏の作業がこの課題にふみこんだものといえるが、そこで示された小様式概念(内房小様式、安房小様式)もまた確かに一つの解決策といえるかもしれない。

いっぽう、北関東系土器については、現在でも以前の研究史の総括(小高 1986)をこえることはないと考えており、重複をさける意味で近年の動向にふれたい。

茨城県南部における調査例の増加が研究の進展にもたらした恩恵は大きい。それによって南部内での地域差が明瞭となり、北部における編年観はもはや通用しない。とりわけ終末期における資料の増加は十王台式、二軒屋式、上稲吉式、南関東系土器相互の対応関係が進展した(茨城県教育財団 1993、1994、海老沢 1993、江幡 1994)。

また、本県における後期土器群の生成に言及したものに小玉秀成氏が挙げられる。氏は本県の北関東系土器の系譜について、足洗式(関戸044号住)→佐野原Ⅰタイプ(古)・阿玉台北→大崎台タイプ(古)・佐野原Ⅰタイプ(新)→大崎台タイプ(新)という変遷を示し、最後の大崎台タイプ(新)(201号住)を後期初頭とした。またこれは重要な点であるが、「縄文施文の複合口縁などは、霞ヶ浦沿岸域や利根川下・中流域以南の足洗式にはその系譜をもとめる事は出来」ないとする。氏はそれを在地の伝統から生まれた「栃木県域の土器」に求めているが、もしそうだとすればこれは本県の後期北関東系土器(縄文施文の複合口縁を主流とする)の出自を考える上できわめて重要な提言といえよう。関連する赤井戸式土器(群馬県から栃木県にかけて分布する後期の土器)についても、既に大木伸一郎氏は同様の見解を述べているところである(大木 1991)。この他には茨城県内の資料の集成も挙げてよいだろう(『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』)。

このように、豊富な資料の蓄積に伴って現在では地域差の存在のみならず、その系統的な解釈についても多くの研究者が共有するようになってきている。問題解決の決め手はそれをいかに解釈するか一しかも、明快かつ一定の基準のもとに一ということであろうが、そのためには地域差の実態についてまず把握する必要がある。以下各郡ごとに後期弥生土器の様相を概観する

ことにする。

### 3. 県内各郡の概要

県内各郡の様相を述べるに当たっての注意を次に記す。

- 1、旧郡単位による解説とした。
- 2、土器の内、対象を壺（今回は文様区画のあり方に留意した）と甕に絞った。
- 3、用語についての凡例は第1図を参照のこと。
- 4、挿図は概ね上位が古く、下位が新しいが厳密なものではない。  
それでは、以下南の方からみていこう。

#### (1) 安房郡

房総半島の南端部にあたり、西側は東京湾を隔てて三浦半島と接する。その沿岸部は無霜地帯であり、南国的な景観をていする。

本地域は県内では最も調査例の少ないところであり、当然のことながらまとまった資料に乏しく、僅かに田子台遺跡また健田遺跡をあげるのみである。以下両遺跡を中心にその様相をみることにする。

**田子台遺跡**（菊池他 1954） 2軒の住居跡より豊富な遺物が出土した。壺形土器は一部に結節区画がみられるものの、そのほとんどは沈線区画—いわゆる幾何学的文様しかり—によるものである。一方、甕形土器は複合口縁ないし輪積甕で、台付である。器面の調整は実測図をみるかぎりナデによると思われるが、説明がないので確定できない。

**健田遺跡群**（玉口他 1975～1985） 数次にわたる調査によって薬師前遺跡他で該期の遺物の出土がみられたが、完形品はすくない。壺形土器の様相は田子台遺跡とそれほど変わらないが、結節文や網目状燃糸文が一定の割合を占めている。甕形土器は輪積みで平底・ナデ調整が主流を占めるが、輪積みのみられないものや台付のものも存在する。

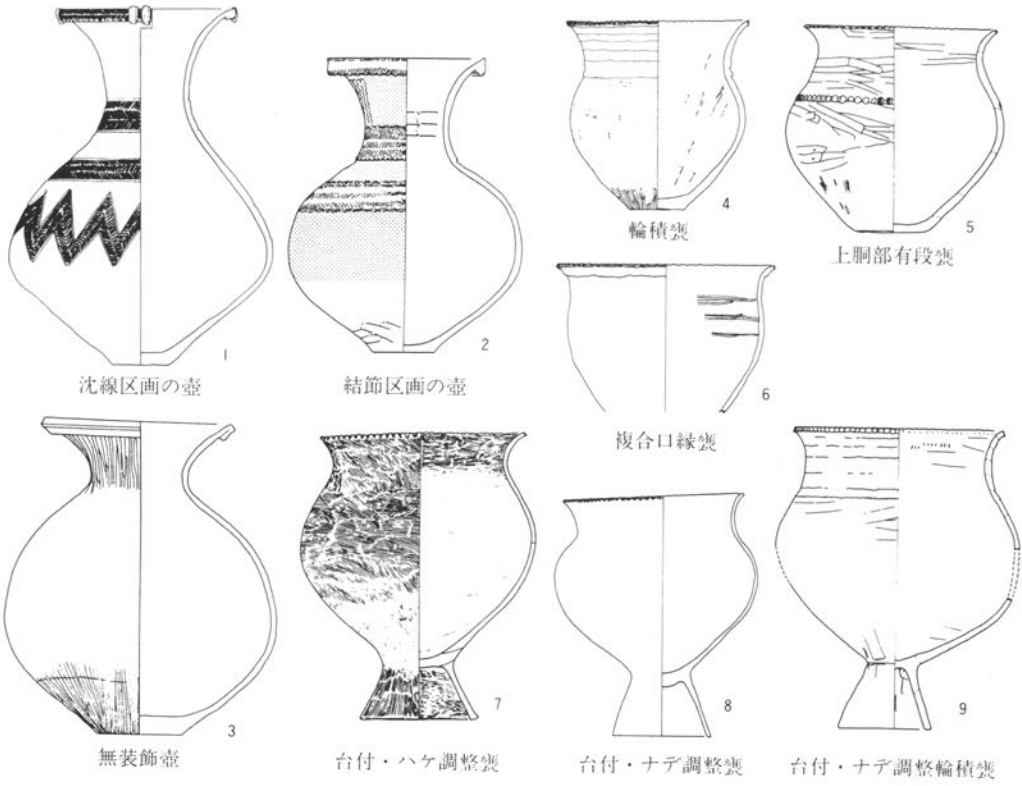
本遺跡群の遺物は当然のことながら一定の時間幅をかんがえる必要がある。

**その他** 安房国分寺跡（市毛他 1978、1979）、永野台遺跡（玉口他 1981）、明鐘岬洞穴遺跡（菊池他 1954、対馬 1956）等が挙げられるが、いずれも前記2遺跡の内容をこえない。

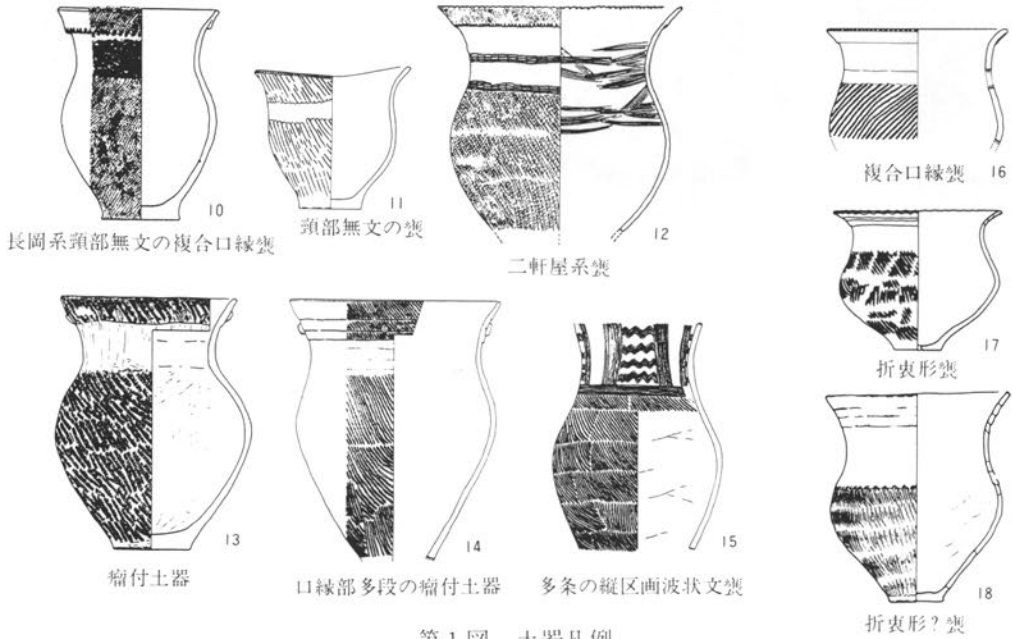
#### (2) 君津郡

近年の調査件数の増加にともなって資料の充実著しい地域である。南の方から順次みていこう。

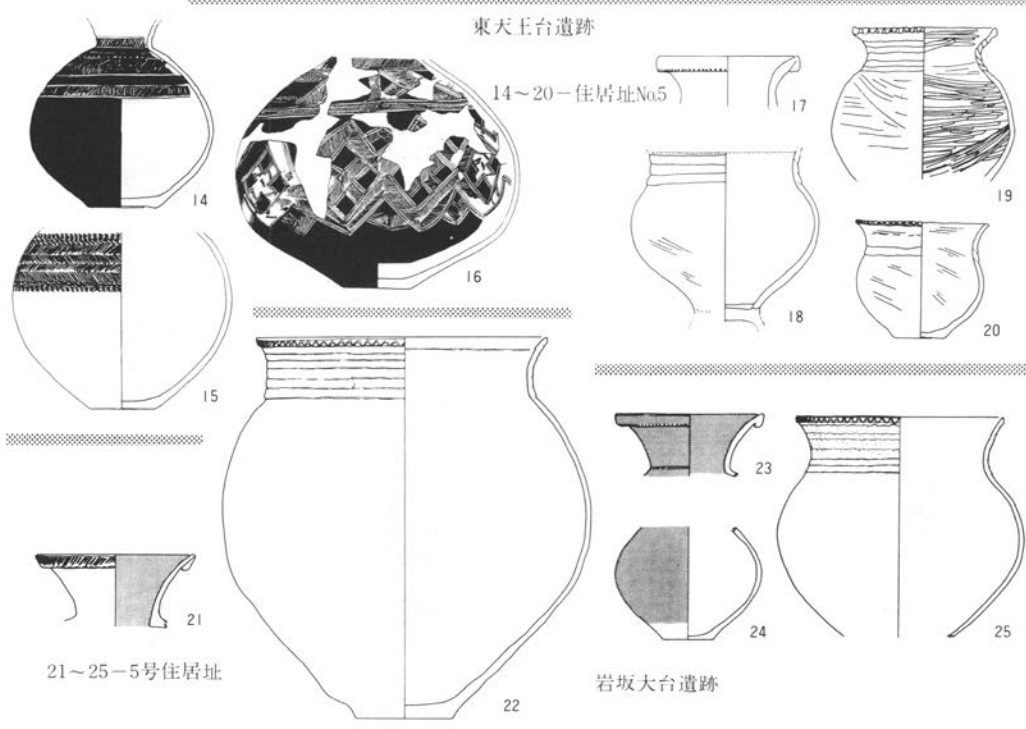
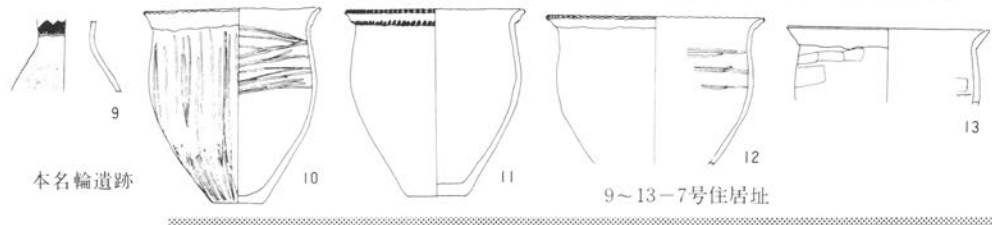
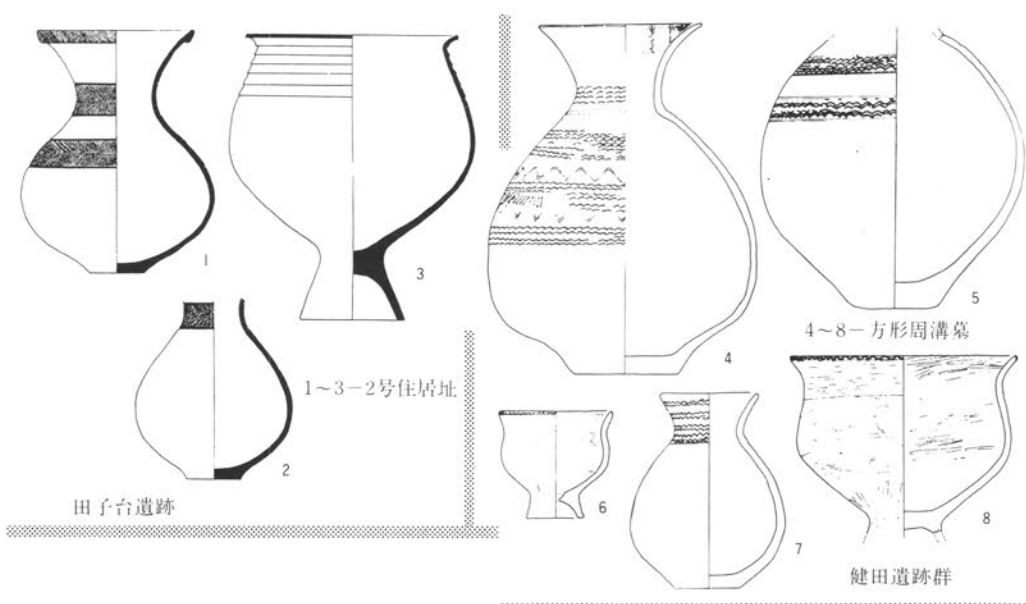
**岩坂大台遺跡**（大原 1983） 湊川下流右岸の遺跡である。16軒の住居跡より多くの遺物が



1~9南関東系、10~15北関東系、16~18折衷または在地形



第1図 土器凡例



第2図 安房・君津郡南部の土器(1/8)



出土した。壺形土器は概して文様に乏しく、口縁部及び上胴部に無区画また結節文区画の縄文帯を一条めぐらすのみで、鋸歯文はみられない。甕形土器は輪積ナデ調整甕で占められ、底部は平底と台付がみられる。

伴出遺物からみて、弥生時代終末期の段階の所産と考えられ、近接する富士見台遺跡（平野他 1987）も類似する様相を呈する。

**東天王台遺跡**（山下 1984） 岩坂大台遺跡に近接する。僅かに6軒の住居跡ながら資料としてはみるべきものがある。壺形土器は縄文帯及び網目状撚糸文帯に結節また沈線区画の両者がみられるが、胴部の幾何学的文様も一部にみられる。甕形土器は岩坂大台遺跡と同じ手法である。遺物の様相から岩坂大台遺跡に先行する時期に位置付けられる。

**打越遺跡**（酒巻 1992） 富津洲東端丘陵下の沖積地に立地する。大規模な集落ながら遺構の重複が激しい。壺形土器は頸部から胴部にかけて主に沈線区画の縄文帯、山形羽状縄文帯を施すもの、口縁から頸部に縄文帯を集中させるもの、小形で内傾する口縁から頸部に羽状縄文帯を施すものにはほぼ3大別される。一方、甕形土器は約200個体に及ぶ実測品のほとんどが輪積みの平底・ナデ調整甕である。

**本名輪遺跡**（平野 1986） 小河川の段丘面上に立地する。住居跡の遺存は皆不良ながら、内1軒より良好な一括資料が出土した。甕形土器はいずれも複合口縁で、口唇部に押捺のみられないものもある。すべて平底、ナデ調整甕である。壺形土器にはみるべき資料がない。

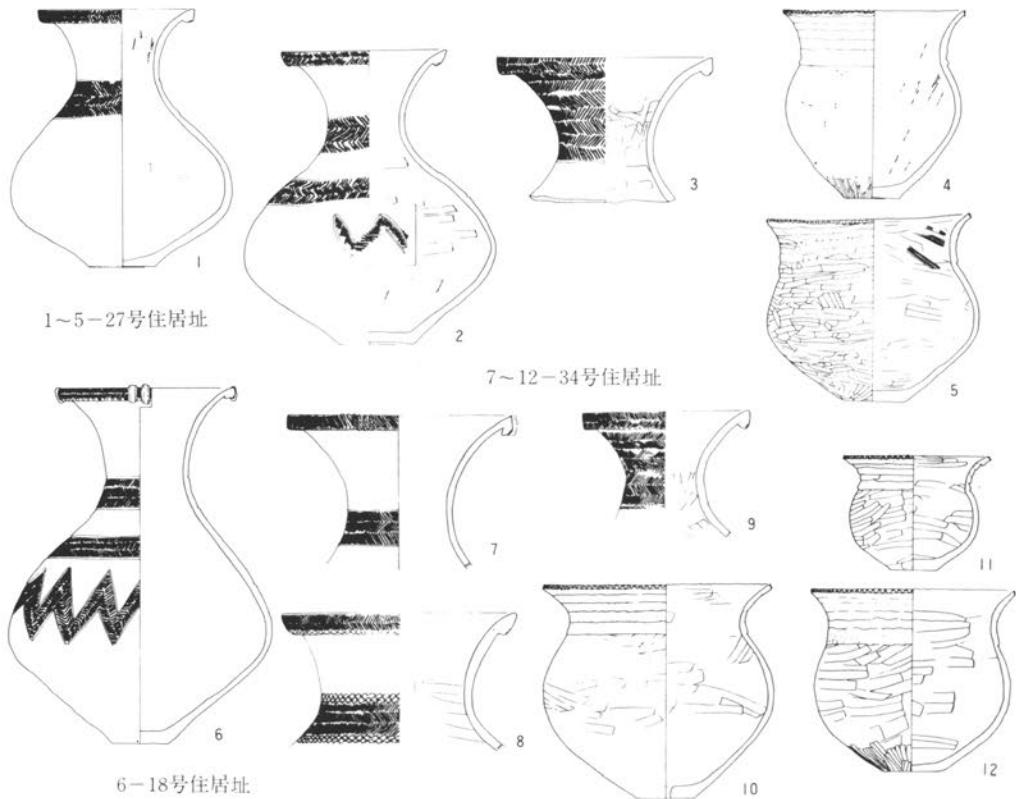
本遺跡出土資料は近年の調査成果により、後期初頭に位置付けられることが明らかである。

**マミヤク遺跡**（小沢他 1989） 木更津市街を北西眼下にのぞむ台地上に立地する。打越遺跡と同様、大規模な集落跡であり、遺物の様相も類似するが、重要な違いが一、二ある。それは壺形土器において結節区画が沈線区画を凌駕することで、結節そのものも節を大きくとってあたかも菱形連繫文とでも称すべきものが多々みられる。この他に内傾の小型土器がほとんどみられないこと、また、上胴部に一段を有する甕形土器が一定の割合を占めていることも挙げておきたい。

**請西遺跡群** 昭和46年度より継続して調査が行われており、大山台、道上谷、山伏作、中郷谷、鹿島塚の各地区でまとまった集落が検出されている。しかし、残念なことに報告例はその一部（杉山他 1977）であり、今後の刊行をまつほかはない。

**天神前遺跡**（小高 1992） 矢那川中流左岸の台地上に立地する。終末期また移行期の集落跡である。甕形土器の内、伝統的な波状口縁の場合は複合、単純口縁、頸部下位有段、輪積みとバラエティに富むが、すべて平底・ナデ調整甕である。一方、壺形土器も同様伝統的な器形の場合は多く無文で単純口縁である。これに、新来の東海系土器群が加わる。

**滝ノ口向台遺跡**（小高他 1993） 小櫃川中流左岸の遺跡である。28軒の住居跡が検出され



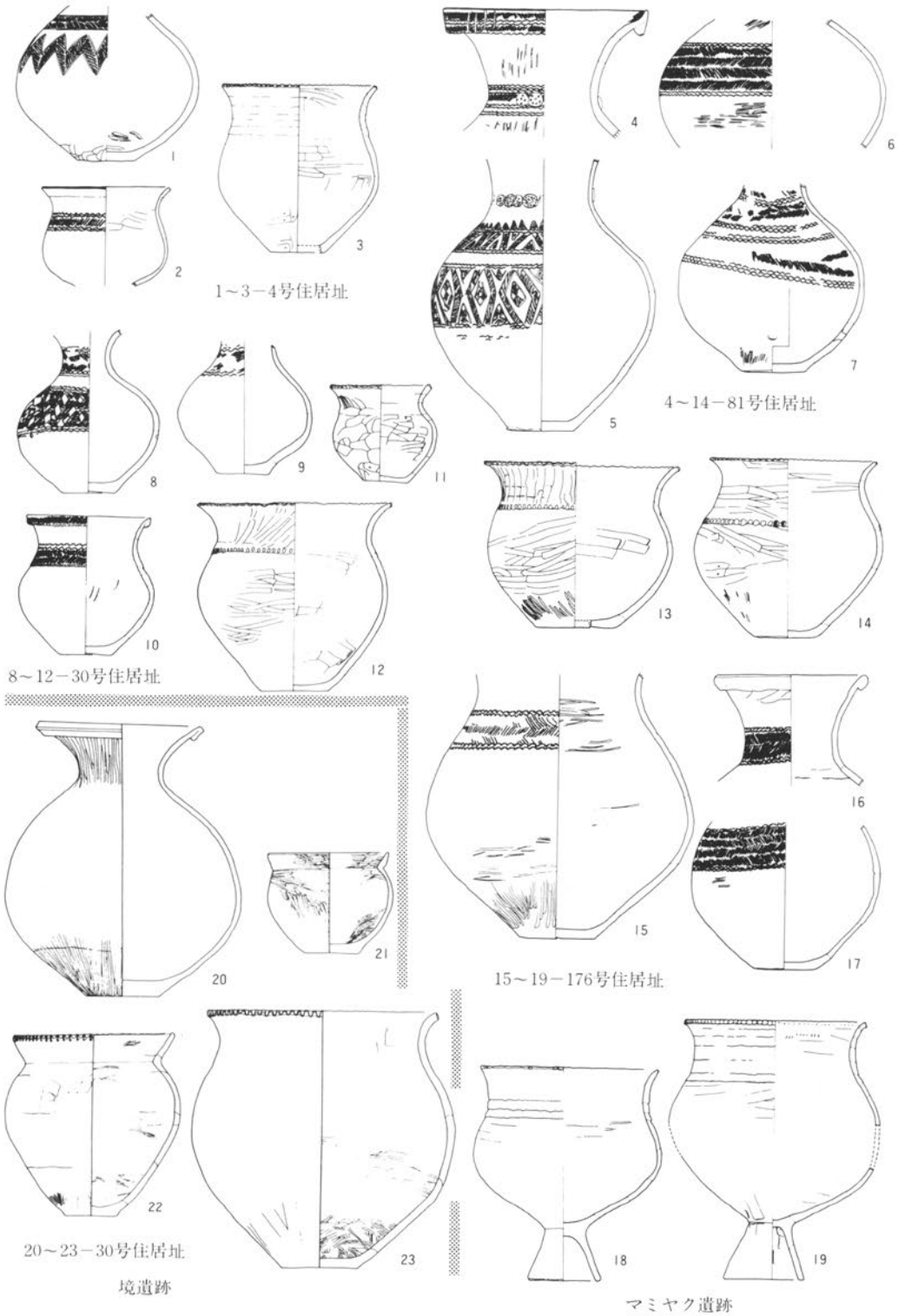
第3図 打越遺跡の土器(1/8)

ているが、遺物量はそれほど多いわけではない。ただし、後期でも前半に位置付けられることは明らかであり、近接する大作古墳群（後期後半の住居跡14軒検出）との対比の上でも注目される。

土器の様相はマミヤク遺跡と基本的に類似するが、後期の初めの段階で既に結節文区画が優位を占めていることは確かである。

**境遺跡**（小沢 1985、牛房 1985、能城 1989） 小櫃川下流右岸に立地する。中期環濠集落の西側を数次にわたり広範囲に調査する。遺物も後期全般に及び、幅のある内容を呈する。壺形土器は結節区画と沈線区画の両者が見られるが、山形羽状縄文帯はすべて沈線区画である。甕形土器は上胴部有段例が多いが、輪積、複合また単純口縁と様々である。なお、終末期の好例として無装飾の複合口縁壺に波状口縁、平底・ナデ調整甕が伴う。

**その他** 袖ヶ浦市金井崎遺跡（後期の大規模な集落跡）、富津市史所収の遺物（野中 1982）、君津市上野台遺跡（後期住居跡約60軒、未報告）、宮脇遺跡（小高 1988）、木更津市高千穂古墳群墳丘下の集落（戸倉 1986）、椿古墳群墳丘下の集落（県文化財センター調査）、後期水田



第4図 君津郡北部の土器(1/8)

跡周辺から出土した遺物(神野 1992)、また、近年の君津郡市文化財センターの調査例(富津市川島遺跡、袖ヶ浦市美生遺跡群、根崎遺跡、文脇遺跡、寒沢遺跡等)等、類例に事欠かない。

### (3) 夷隅郡

上総南東部、太平洋岸の地域である。

**横山遺跡**(矢吹 1978) 検出された住居跡は8軒にすぎないが、調査例の稀少な本郡では最もまとまった資料を提供する。ただし、夷隅郡とはいっても、半島の丁度中央部にあたる内陸部に位置する。

壺形土器は口縁部から胴部にかけて数単位の縄文また結節文帯を沈線区画するものが主体を占めるが、胴部中位に沈線区画の山形羽状縄文帯を施す例も多い。甕形土器は輪積、複合口縁、上胴部有段のものといろいろであり、平底・ナデ調整甕がほとんどを占める。

**台遺跡**(立教大学考古学研究会 1978) 住居跡4軒が検出されているが、概要のみの報告で詳細は不明。横山遺跡と近い位置にあり、内容も類似する。

**引田峯越台遺跡**(江沢 1963) 検出された住居跡は僅か一軒にすぎないが、採集遺物は各器型毎にそろっている。しかし、中期の土器が多くを占め、また、報告も文様の特徴を記述するのみである。壺形土器は肩部に沈線区画の網目状撚糸文帯を施すものである。

**中滝城跡**(立教大学考古学研究会 1983) プランの不明瞭な一軒の住居跡が検出されたのみで、遺物も土器片にすぎないが、太平洋岸の遺跡ということからとり上げた。

**その他** 若干の遺物にすぎないが、立教大学考古学研究会による郡下各市町村の分布調査報告書また大原町史(加藤 1991)他でとり上げられている。

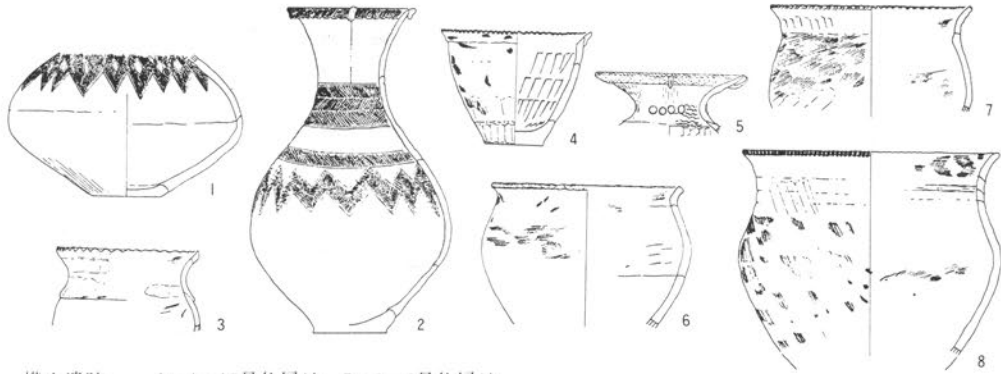
### (4) 長生郡

上総東部の丘陵地帯で、九十九里平野南部を含む。

**日の子川川底遺跡**(久我 1977) 採集品であるが、資料としてはみるべきものがある。壺形土器は口縁部に羽状縄文、頸部また上胴部に羽状縄文と結節文を施すもので、報告者はわざわざ「頸部並に胴部の文様帯には区画の沈線がなく」とことわっている。甕形土器は上胴部有段で、底部の形状は不明。一部にハケ目を施すものもあるという。

**国府関遺跡群**(小久貫 1993) 遺跡の立地環境(谷底)のゆえか、遺物のほとんどは包含層また自然流路に伴うものである。一部中期の土器を含み、古墳時代との判別の困難な遺物も多い。壺形土器は羽状縄文帯及び山形縄文帯を数条の結節文で区画するもので、沈線区画はみられない。甕形土器は輪積また上胴部有段のものに大別される。すべて平底・ナデ調整甕である。

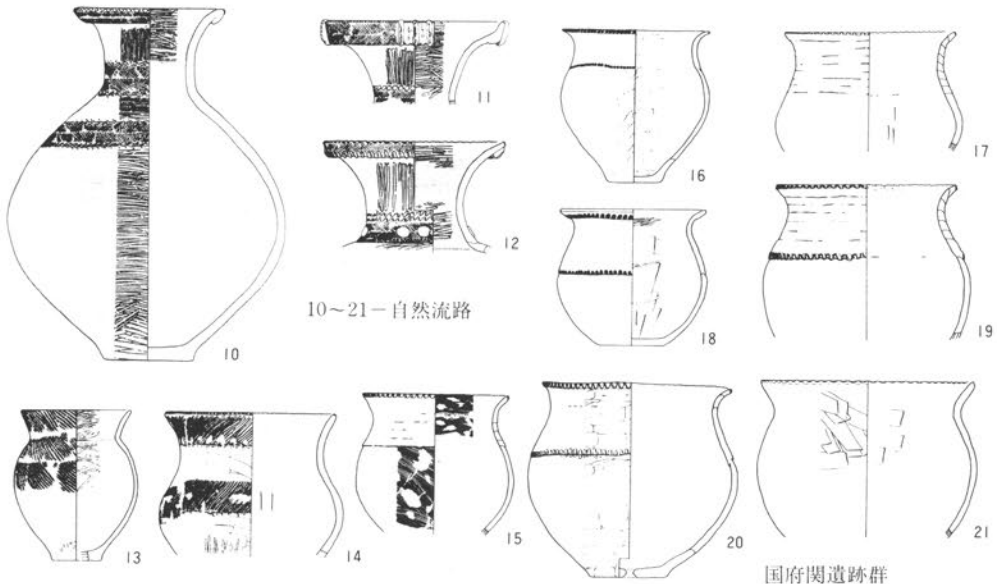
**今泉遺跡**(三浦 1990) 包含層より中期から後期の遺物が出土している。しかし、点数は少なく、僅かに沈線区画の幾何学状山形羽状縄文帯を施す壺形土器を挙げるのみである。



横山遺跡 1~4-13号住居址、5~9-6号住居址

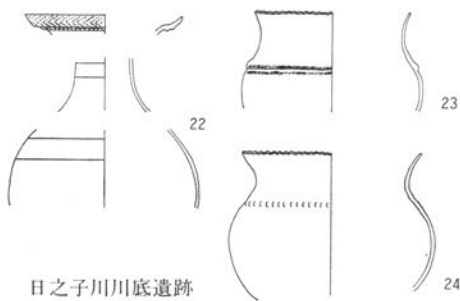
夷隅郡 1~9

長生郡 10~25

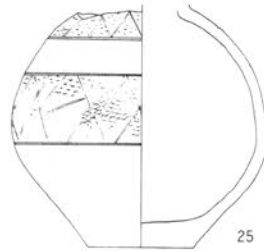


10~21-自然流路

国府関遺跡群



日之子川川底遺跡



長富出土土器

第5図 夷隅・長生郡の土器(1/8)

**長富地区**（戸田 1977） 口縁から頸部を欠く壺形土器である。網目状襷糸文帯上に鋸歯文を不規則に施し、沈線で区画するもので、後期終末から移行期の所産であろう。

**能満寺裏遺跡・根崎遺跡** 有名な能満寺古墳に近接する遺跡群である。近年の数次にわたる発掘調査（長生郡市文化財センター）により、共に中期から後期に及ぶ集落跡であることが明らかになった。報告書の刊行も間近いと思うが、郡内では現在のところ遺構に伴う最もまとまった資料といえる。

**その他** 有名な宮ノ台遺跡出土品、古墳調査に伴って出土した若干の資料（長南町油殿、同能満寺、一宮町待山等）他を挙げるにすぎない。

#### (5) 市原郡

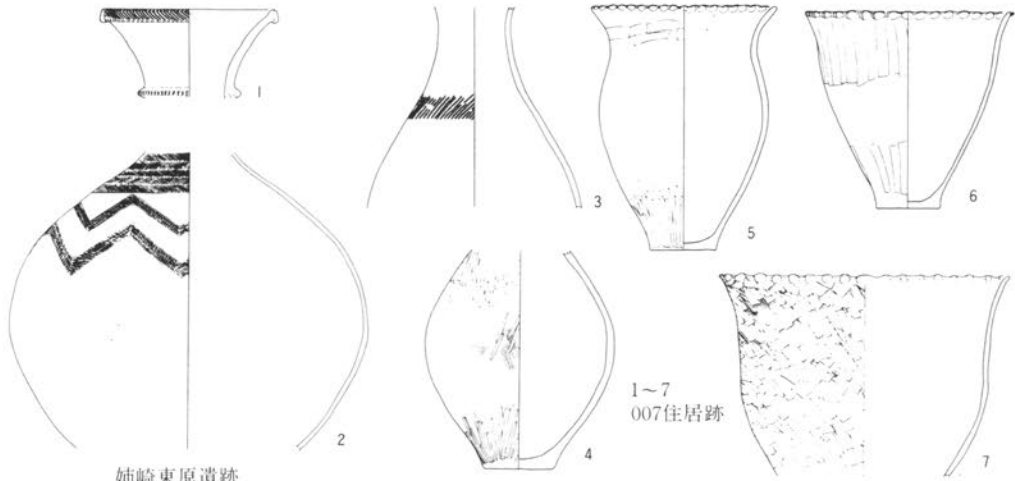
現在のところ資料数からいって上総を代表する地域といつてよい。

**番後台遺跡**（藤崎 1982） 大多喜町横山遺跡と並ぶ上総中央部の遺跡である。住居軒数は約30軒と多いものの、遺構の遺存度が悪く良好な資料は少ない。なお、一部は中期に属するようである。時期的には横山遺跡より下るであろう。壺形土器は沈線区画もみられるものの、結節区画が多くを占める。甕形土器は胴部中位に一段を有する（その多くは刺突列を施す）ものが多いが、痕跡にすぎない輪積み痕を残すものもある。すべて平底・ナデ調整甕である。

**南総中学遺跡**（上條他 1978） 養老川中流域の遺跡である。検出された後期の住居跡は約15軒ながら、その初めに位置付けられる点で注目される。壺形土器は良好な資料に乏しいものの、結節区画の縄文帯・山形羽状縄文帯で占められるようである。なお、南側対岸雪解沢遺跡より出土した壺形土器もこのタイプである（金丸 1984）。甕形土器は後期初めに特徴的な複合口縁のもの、胴部中位に一段を有するものの他に、輪積みのものもみられる。すべて平底・ナデ調整甕である。

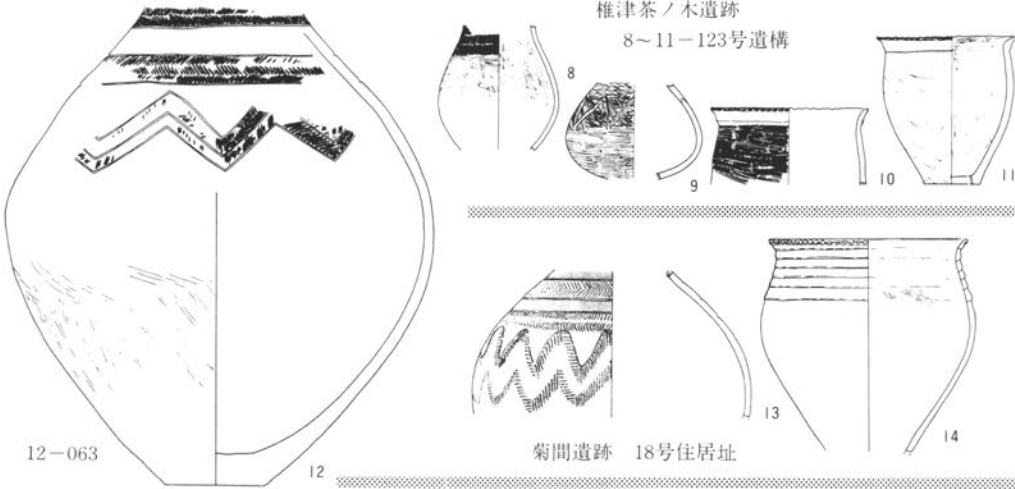
**土宇遺跡**（柿沼 1979） 養老川中流域の後期後半の様相をみるうえで標識的な遺跡である。約80軒の住居跡より出土した遺物の絶対量は多く、この点においても特筆される。壺形土器は結節区画が主体を占めるが、結節文帯のみで区画を有しない例も多くみられる。また、文様の簡素化、省力化が窺える。単純口縁の小型・無文の壺が現れるのもこの頃であろう。甕形土器は輪積みながら段の不明瞭なもの、胴部上位また頸部下位に一段を有するものが主体を占めるが、僅かながらまったく輪積み・段差のみられない例もある。すべて平底・ナデ調整甕である。なお、関連するが台付・ハケ調整甕はすべて古墳時代または移行期の所産と考えている。

**椎津茶の木遺跡**（木對 1992）・**姉崎東原遺跡**（高橋 1990） 養老川下流左岸の遺跡である。両者は約1 km程離れているが、共に中期末から後期初頭の遺物を出土していることから一緒に扱った。椎津茶の木遺跡の123号遺構は複合口縁甕の初現的形態がみとめられ、共に出土した壺形土器は宮ノ台式土器の範疇内にある土器である。一方、姉崎東原遺跡は甕形土器はまったく



姉崎東原遺跡

1~7  
007住居跡

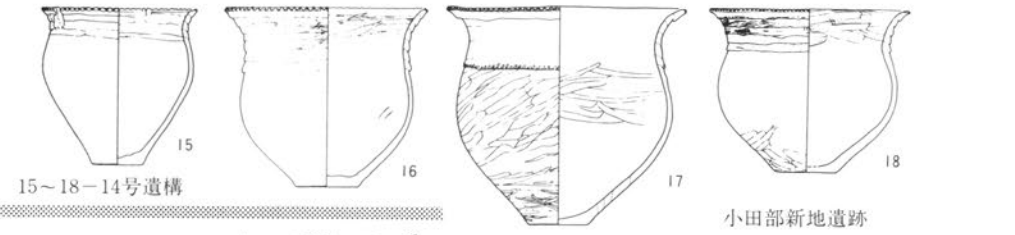


椎津茶ノ木遺跡  
8~11-123号遺構

12-063

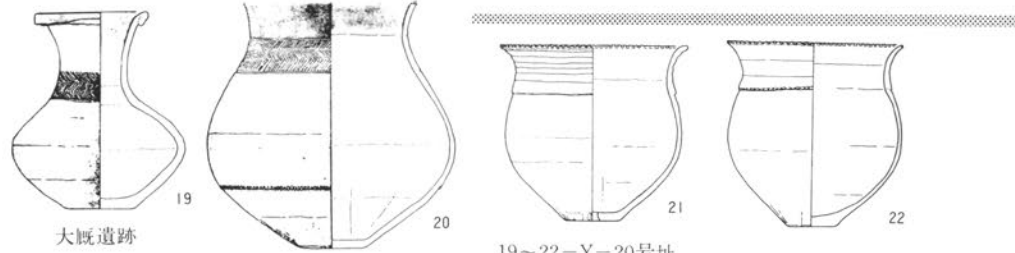
菊間遺跡 18号住居址

滝ノ口向台遺跡



15~18-14号遺構

小田部新地遺跡



大厩遺跡

19~22-Y-20号址

第6図 市原~君津郡の中期末~後期初頭の土器(1/8)

宮ノ台式土器ながら、壺形土器は細い頸部に小さな複合口縁、区画なしの羽状縄文帯と縄文による山形文がみられることなど、後期壺形土器の初現的特徴を有するものである。

**原遺跡**（越川他 1984）・**毛尻遺跡**（武部他 1983） 同じく養老川下流左岸の遺跡で、近接することから一緒に扱った。後期中頃から後半の中規模の集落跡と見てよいが、遺物は少ない。壺形土器は結節区画が、甕形土器は上胴部有段甕が主体をなす。

**小田部新地遺跡**（山口 1984）・**小田部向原遺跡**（大村 1991） いずれも神崎川（村田川の支流）上流域に立地する遺跡で、川を挟んで相対することから一緒に扱った。小田部新地遺跡は一遺構より後期初めの良好な資料（甕形土器）が出土した。輪積甕が多いが、他に上胴部有段またそれと複合口縁を兼ね備えた甕がみられる。輪積甕は最大径を口縁部に有し、輪積みがほぼ頸部に限定される後期初頭に特徴的なタイプである。小田部向原遺跡は小規模の調査で遺物量も少ないが、小田部新地との系統関係をおうことができる。壺形土器は結節、沈線両区画がみられ、甕形土器はすべて上胴部有段の平底・ナデ調整甕である。

**武士遺跡**（半田他 1976、県文化財センター 1989） 養老川中～下流域右岸の若干内陸寄り台地上に立地する。広大な台地上に後期後半の約70軒の住居跡が展開し、そのあり方は山田橋表通遺跡と類似する。県文化財センター分は整理途上で、僅かに工事に伴う調査会分が報告されている。結節区画の壺形土器に上胴部有段の平底・ナデ調整甕が伴う。

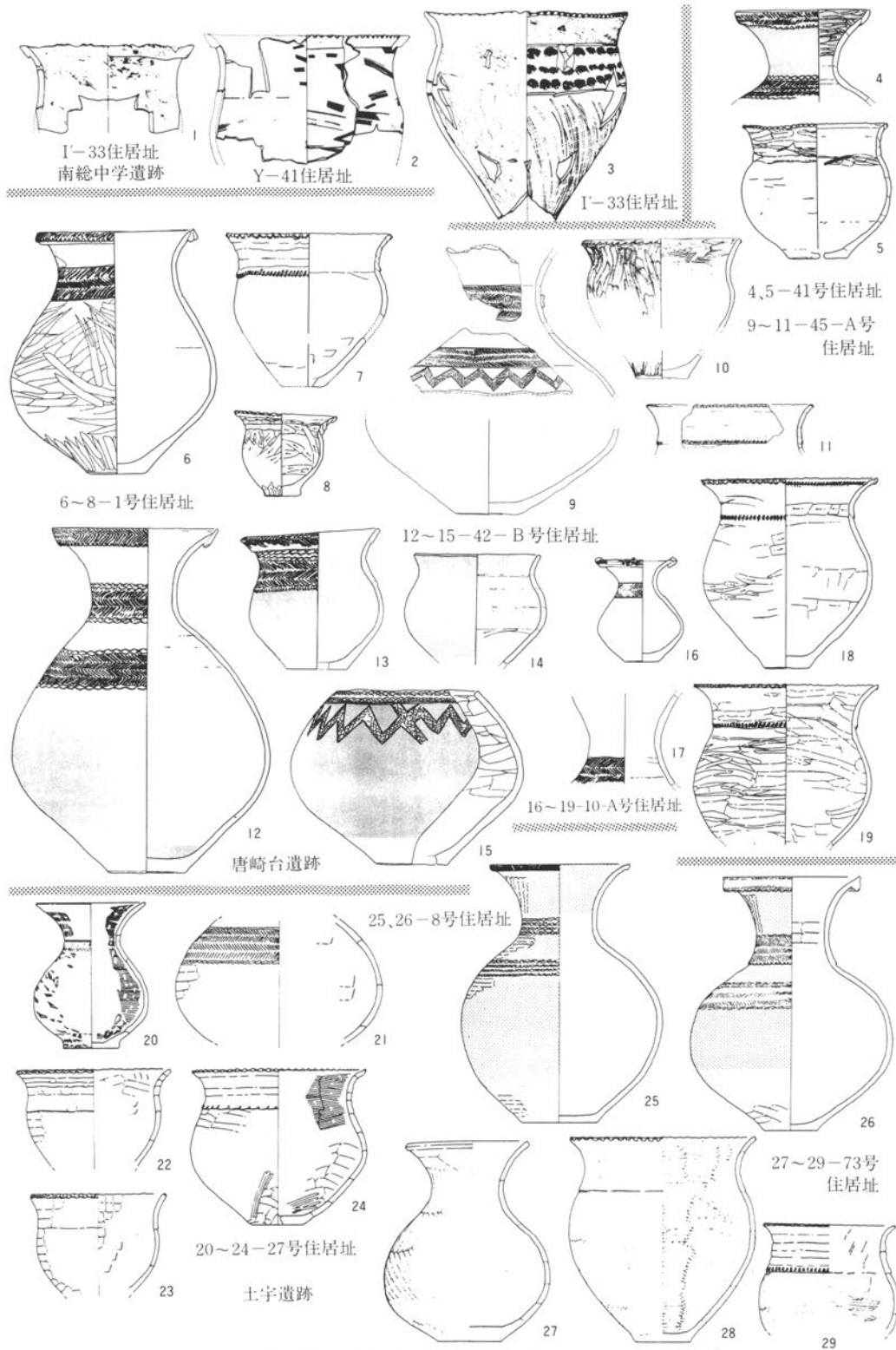
**国分寺台遺跡群**（根田、天神台、台、向原台、加茂、中台、祇園原） とりわけ、天神台と台の両遺跡が大規模な集落跡であるが、いずれも概報にとどまっており、僅かな報告遺物によって類推するのみである。既報告の内、加茂遺跡第2号住出土遺物は後期後半の良好な一括遺物として挙げておく（菊池他 1976）。壺形土器はすべて2～3条の結節帯区画である。甕形土器はすべて上胴部有段のナデ調整甕であるが、底部は6個の内5個が平底、1個が台付である。なお、加茂遺跡の方形周溝墓より出土した一括遺物も終末期の様相を示すものとして特筆される（菊池他 1976）。

**唐崎台遺跡**（鈴木他 1979） 海岸平野から小さな谷沿いに若干遡った台地上に立地する遺跡である。後期前半から終末にわたる約60軒の住居跡が検出されている。

壺形土器は結節区画と沈線区画の両者がみられ、縄文の他に網目状撚糸文帯の施文例も多い。概して沈線区画の壺形土器には輪積みまた上胴部有段の甕形土器が伴うのに対し、結節区画及び網目状撚糸文帯の壺型土器には頸部有段また痕跡のみの輪積甕が伴う。前者が後者に先行することは明らかである。なお、甕形土器のほとんどは平底のナデ調整甕であるが、一部に刻目口縁の平底・ハケ調整甕もみられる。

**山田橋表通遺跡**（近藤 1986） 唐崎台遺跡の南約1kmに位置する。広い台地上に展開する後期中頃以降の大規模な集落跡と思われる。1軒の住居跡より出土した5個体の土器が報告さ





第7図 養老川中流域の土器(1/8)

れている。結節また網目状撚糸文帯区画の壺形土器に、上胴部有段の平底・ナデ調整甕が伴う。

**大厩遺跡** (阪田他 1974) 村田川中～下流域左岸の遺跡である。調査・報告年度が早いこともあり著名であるが、中期末から後期初頭のまとまった遺物がみられる点は強調してよい。

中期終末から移行期の甕形土器は伝統的なハケ調整の捻り波状口縁甕に、最大径を口縁部また上胴部に有する頸部集約型の輪積甕が共存するかたちであるが、どういうわけか、この期に特徴的な複合口縁の甕がほとんどみられない。すべて平底・ナデ調整甕である。伴う壺形土器は良品が少ないが山形文の祖形と沈線区画の縄文帯である。

**菊間遺跡** (斎木他 1974) 村田川が河谷部から海岸平野へと抜けるその接点を見下ろす南側台地上に立地する。後期の住居跡は約25軒を数えるものの、重複が激しくその帰属には注意を要する。なお、1基の方形周溝墓(第1号周溝)よりの出土品について、報告者は帰属に分明を欠くとするが、内容から終末の一括資料とみて問題ないと考える。

**草刈遺跡** (小久貫 1983、高田 1986、白井他 1993、千葉県文化財センター 1979～1993) 村田川を隔てて菊間、大厩両遺跡を南側にのぞむ東西に長い広大な台地上に中期～後期にわたる大規模な集落が展開する。住居の検出総軒数は現在約800軒を数えるが、最終的には千軒をこえることは確実である。報告軒数はその約4分の1にすぎないが、遺物の絶対量の多さ及び今後の資料数を前提にすると、村田川下流域の標識的な遺跡とってよい。

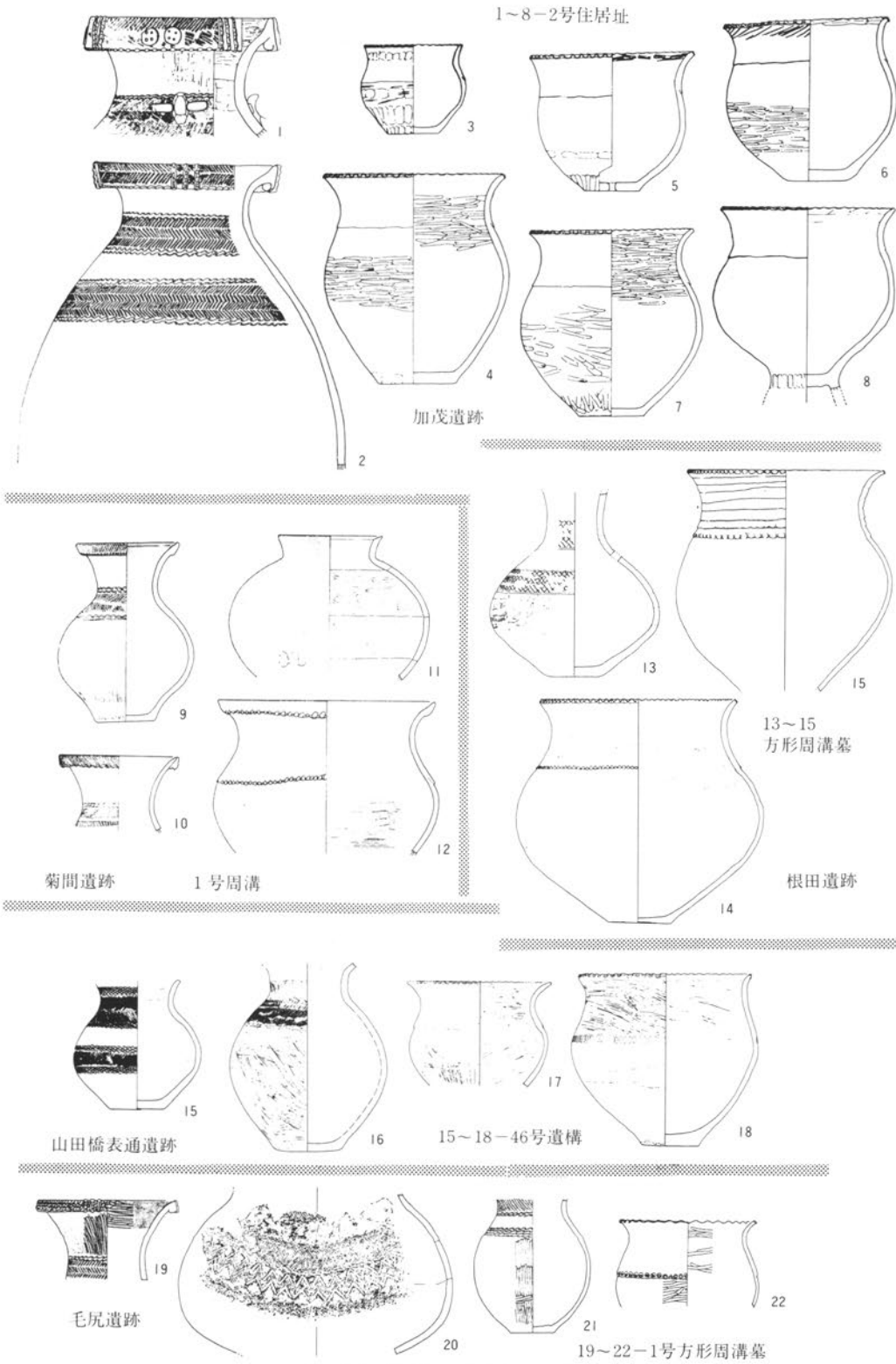
壺形土器は沈線区画と結節区画がみられるが、後者が前者を圧倒する。しかし、これはたぶん既報告地区が集落の西側外縁部に相当するという条件の差を示している可能性が高い。後期でも初めの集落は中期と一部重なって立地するものと思われるからである。甕形土器は輪積また上胴部有段甕で占められ、一部にハケ調整らしきものもみられるがそのほとんどは平底・ナデ調整甕である。

**その他** 市原市は近年の開発に伴い資料の増加著しい地域であり、上記以外の類例に事欠かない。山田橋大塚台、六孫王原、菊間手永、大厩浅間台、川焼台・草刈古墳群、浅井小向釜神遺跡といったところである。ただし、いずれも上記の内容を大きくこえるものではない。

## (6) 千葉郡

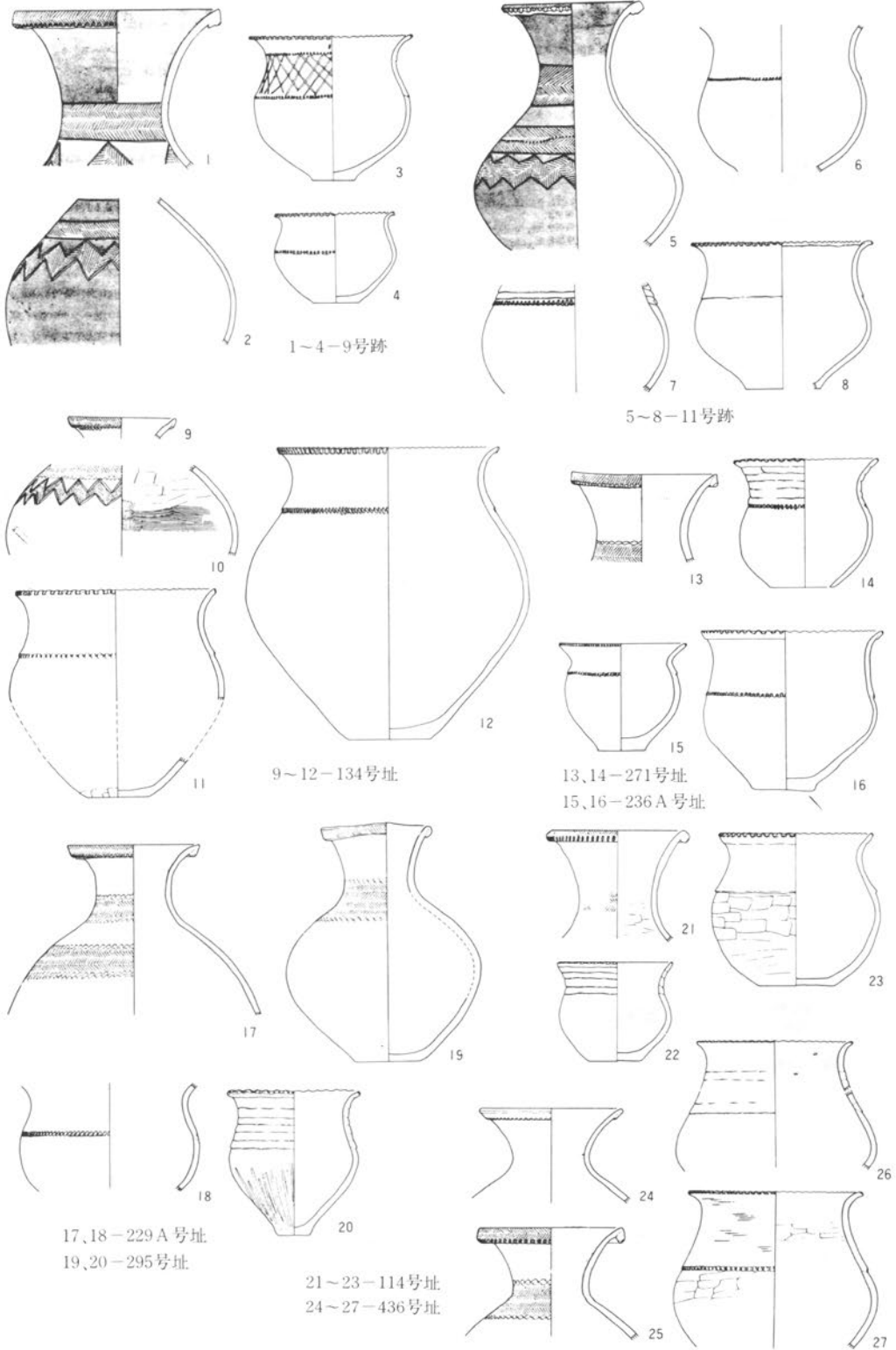
**田向南遺跡** (田川他 1984) 都川中流域右岸に位置し、城の腰また星久喜遺跡の対岸に立地する。11軒の住居跡よりまとまった資料が出土しているが、ほぼ甕形土器で占められている。輪積甕と上胴部有段甕に二大別され、すべて平底・ナデ調整である。後期後半～終末の資料としてみるべきものがある。

**城の腰遺跡** (菊池他 1979) 都川中流域の遺跡である。中期の集落跡として有名であるが、後期には小規模な集落が営まれる。上胴部有段(内1例は胴部中位にも段を有する珍しいもの)の甕形土器に限られるが、佐倉地方に分布する北関東系土器を伴出する点は注目される。



第8図 養老川下流域の土器(1/8)

千葉県における弥生時代後期土器の地域性について



第9図 草刈遺跡の土器(1/8)

**東寺山石神遺跡** (深沢 1977) 葭川(都川の一支流)中流域の遺跡である。遺物の多くが北関東系土器で占められ、どうやら都川右岸のあたりが境界になりそうである。北関東系土器は複合口縁部と胴部に附加状縄文(胴部は結節区画)、頸部無文を主体とするが、頸部に多条の山形文、平行線文、波状文を施す例もみられる。この他に波状口縁で輪積頸部上に附加状縄文を施す折衷形もみられる。南関東系土器は良品に乏しいが、羽状縄文帯及び山形羽状縄文帯を沈線で区画したものがみられる。

**その他** 星久喜遺跡、荒久遺跡、馬ノ口遺跡等、その一部が弥生時代として報告また位置付けられた遺跡もあったが、今日ではすべて移行期の所産とみてよいであろう。

#### (7) 山武郡

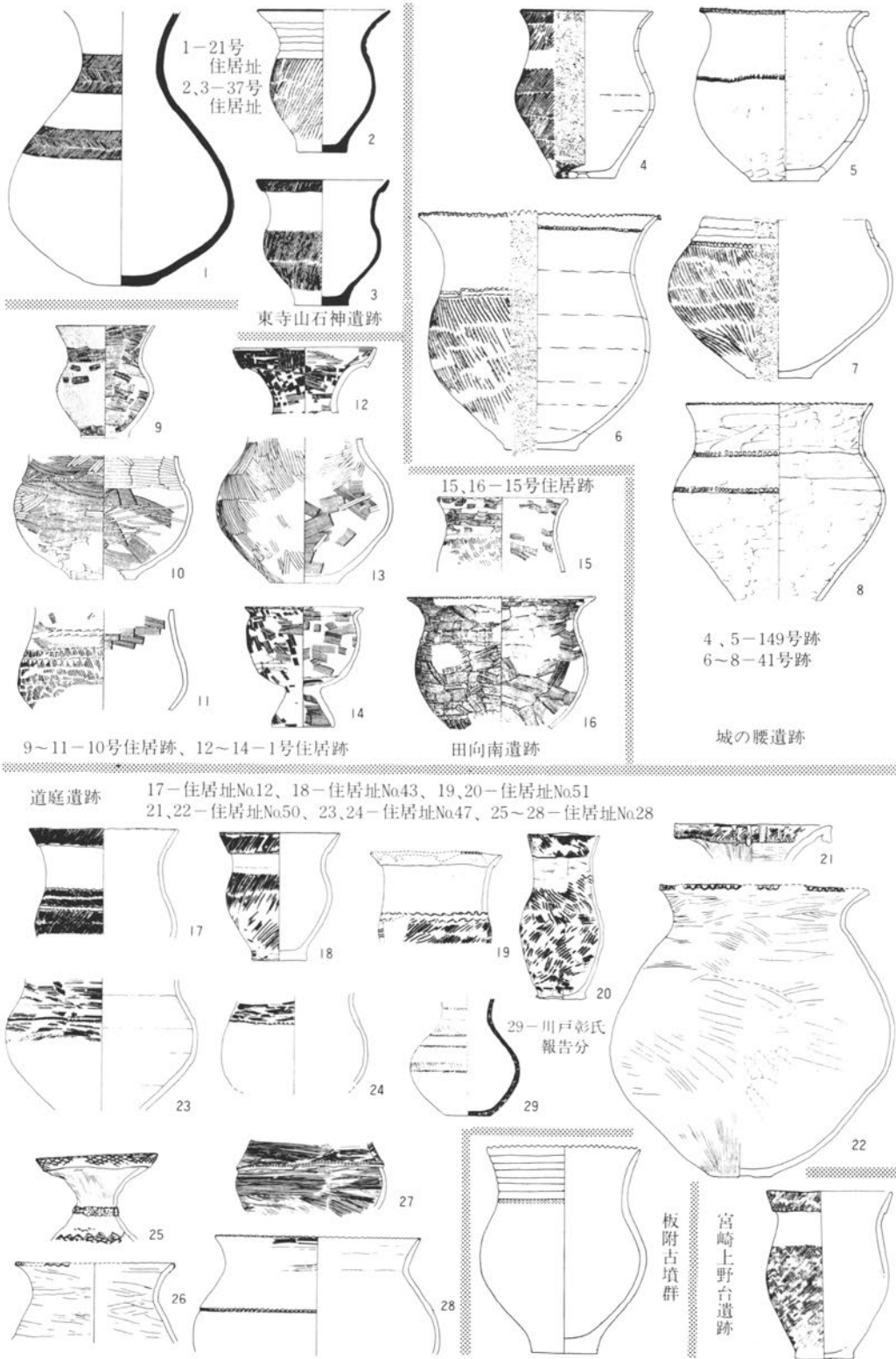
**道庭遺跡** (小高 1983) 調査例の少ない山武郡にあって、現在のところ最もまとまった資料を提供する。外房地域における発掘調査例としては初めて北関東系土器が一定の割合をもって組成に参画する。まず、南関東系土器であるが、壺形土器は縄文帯また山形縄文帯を沈線区画するものと結節区画するものの両者がみられるが、同一個体においても両者が認められる。甕形土器は上胴部に一段を有するものとまったく輪積みのみられないものが主体であるが、輪積み痕を残すものも確かに存在する。すべて平底のナデ調整甕である。なお、同一遺跡としてもよいであろうが、北西台地下で出土した壺形土器は羽状縄文帯を結節文で区画するものである(川戸 1956)。次に、北関東系土器は破片資料が多いものの、後期初めの資料がみられる点は注目してよい。壺形土器も僅かに存在するが、主体は特徴的な甕形土器である。複合口縁で胴部中位から下位に附加状縄文また縄文を施し、頸部を無文とするもの(この場合、頸部と胴部との境界は原体末端を結束させたものまた結節文を施す例が多い)、また、頸部に多条の縦区画波状文や撚糸文及び刺突を施す口縁部多段のものなども存在するが、本遺跡の場合、後者が前者に先行する傾向があるようである。

**板附古墳群** (松井 1975) 墳丘下より検出された一軒の住居跡より甕形土器が出土している。輪積みで平底のナデ調整甕である。

**その他** 山武郡市文化財センター等により近年該期の調査例もみられるようになったが、そのほとんどが遺物のみ出土である。完形品の出土例としては宮崎上野台遺跡(戸村 1992)、菱田平通寺遺跡(戸村 1992)、板附地区出土(小高 1992)等が挙げられるが、後2者は移行期～古墳時代初頭に位置付けられるものであろう。芝山町における戸村のような基本的な作業(戸村 1992)が他の市町村でも望まれる。なぜならその結果をみる限りでも南北どちらかの卓越状況が類推可能となるからである。

#### (8) 東葛飾郡

茨城県南西部また埼玉県、東京都との影響が色濃くみられる地域である。



第10図 千葉、山武郡の土器(1/8)

**夏見大塚・夏見台遺跡** (松浦他 1972～佐藤他 1976) 海老川低地を見下ろす南向きの広大な台地に大規模な後期の集落が存在するようである。南北両系統の土器群が混在しており、遺構によってその割合が異なるようである。遺構数に比して良好な資料がすくない。南関東系の壺形土器は結節区画と沈線区画がみられる。一方、甕形土器は複合口縁のもの、上胴部に一段を有する(圧痕列のみのものもある)ものがあるが、輪積装飾も僅かに存在するようである。なお、平底・ナデ調整が主体ながら、台付、刷毛調整もみられる。北関東系土器は口縁部多段の甕形土器が南関東系の複合口縁甕と伴っており注目される。

**須和田遺跡** (熊野 1965、杉原 1971) 検出遺構数そのものは少ないが、遺跡の立地条件からして、中期から後期に及ぶ大規模な集落跡の存在が考えられる。南関東系の壺形土器は沈線また結節の両区画がみられ、甕形土器は不明瞭ながらたしかに輪積甕も存在する。台付・ハケ調整の甕も挙げているが、古墳時代との区別は判然としない。北関東系の甕形土器は後に述べるあじき台タイプが主流であるが、複合口縁・頸部無文のものもみられる。

**諏訪原遺跡** (関根他 1974) 須和田遺跡東側の谷を北に約3km程さかのぼった台地上に立地する。弥生時代後期から古墳時代初めにかけての遺跡で、主体を占めていた北関東系土器にかわって、古墳時代の移行期には西方の土器群にとってかわる好例である。北関東系の甕形土器は時期的にあじき台遺跡の延長線上にある土器である。

**笹原遺跡** (飯塚 1981) 江戸川低地から若干中に入った台地上に立地する。北関東系が主流であるが、南関東の土器も確かに認められる。土器は次に挙げた中馬場遺跡と変わらないが、これに輪積(胴部との境界には刺突列)甕が伴う。

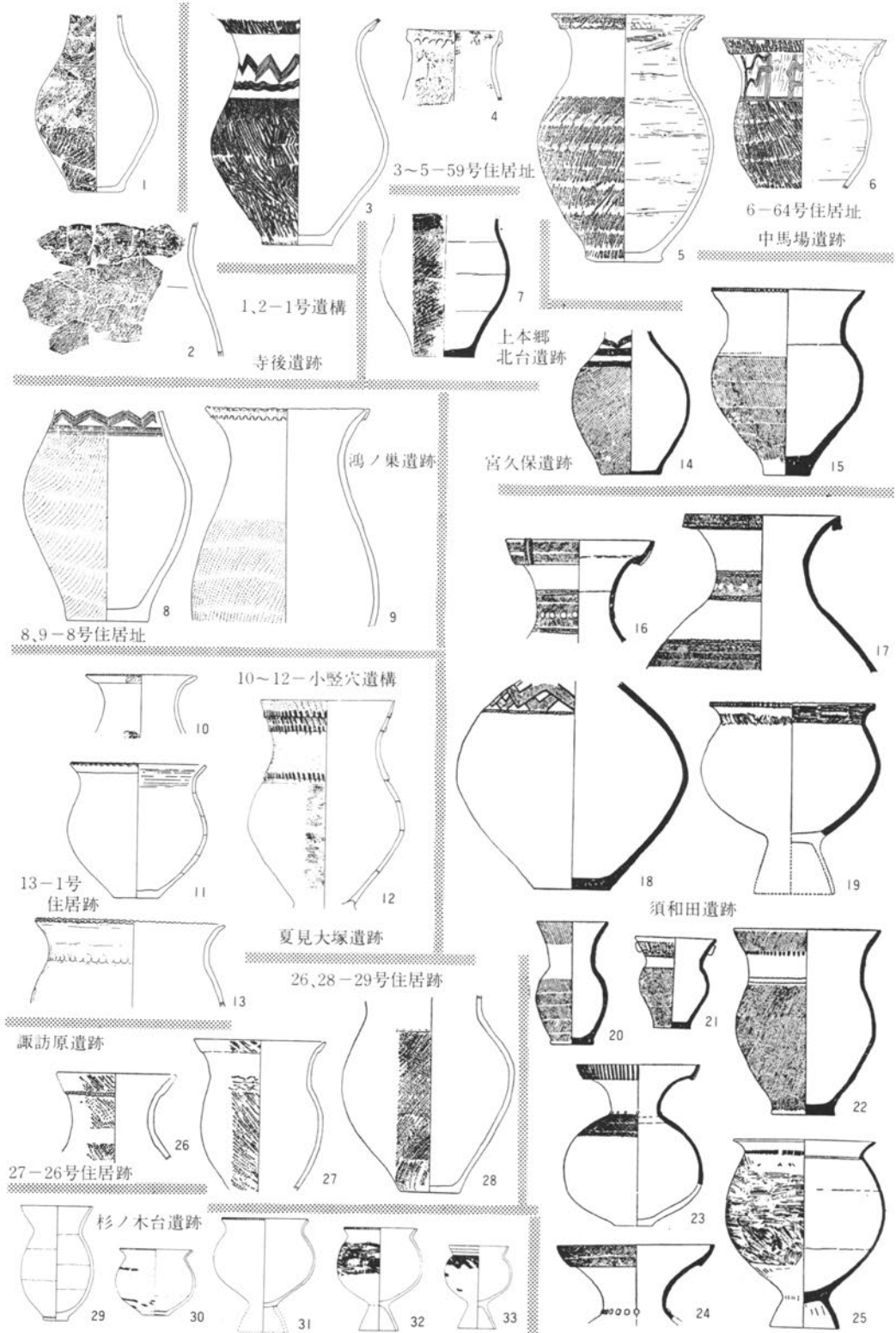
**中馬場遺跡** (古宮 1976) 利根川南岸の遺跡である。地理的条件のゆえか、土器はすべて北関東系で占められている。複合口縁下端に刺突または押圧による圧痕列、頸部は無文もみられるが、多条の波状文、山形文を施すのを特徴とする。縄文は附加条が多いが、単なる複節も存在するようである。壺形土器は明瞭でない。

**海老内台遺跡** (三上他 1966) 1軒の住居跡より好資料が出土している。中馬場タイプの甕形土器に、同じく刺突列を有する口縁部多段の甕形土器、南関東系の口縁部羽状縄文帯の椀形土器が伴う。

**寺後遺跡** (飯塚 1983) 最北といってもよい野田市の遺跡である。頸部に連弧文、斜格子文、胴部に附加条縄文を施す壺形土器、頸部に多条の波状文、斜格子文を施す甕形土器等、特徴的な土器群である。その文様的な特徴から後期初頭に位置付けられる土器群であろう。

**杉ノ木台遺跡** (熊野 1976) 1軒の住居跡からまとまった資料が出土しているが、大型の壺形土器はみられない。甕形土器は台付のハケ調整が多いが、台付・ナデ調整また輪積甕も存在する。高坏や特徴的な壺形土器等興味あるセット関係である。末期に位置付けられることは





第11図 東葛飾郡の土器(1/8)



確かである。

**その他** 柏市鴻ノ巣遺跡、同戸張遺跡群、沼南町大井東山遺跡等を挙げることができるが、概して東葛飾郡内では後期後半の良好な資料に乏しい。なお、既に菊池氏が紹介している（菊池 1961）遺物の一部（沼南町幸田原出土、柏市戸張遺跡）、また、松戸市道六神遺跡（関根 1961）、同中和倉寒風遺跡（坂詰・関 1963）、市川市殿台遺跡（熊野 1970）等以前に前野町期として報告されたもののほとんどが今日では古墳時代ないしはその移行期と考えられることから除外した。

### (9) 印旛郡

南北両系統の土器が複雑に混在する地域である。

**軽沢遺跡**（千田他 1986） 鹿島川上流域右岸に位置する。4軒の住居跡の内2軒より実測資料が出土しているが、南関東系の土器はなく、すべて北関東系また折衷形である。北関東系の土器は頸部無文の複合口縁甕で、上胴部に結節文帯、口縁部及び胴部に縄文（あるいは附加条か）を施す。一方、折衷形土器は口縁部の形状が不明ながら、輪積みの頸部に全面縄文（附加条か）施文の胴部を有する当地に一般的なもの他に、器形は南関東的ながら頸部下位に輪積みを残し頸部以下を結節文帯と縄文帯で飾る類例に乏しい土器がみられる。

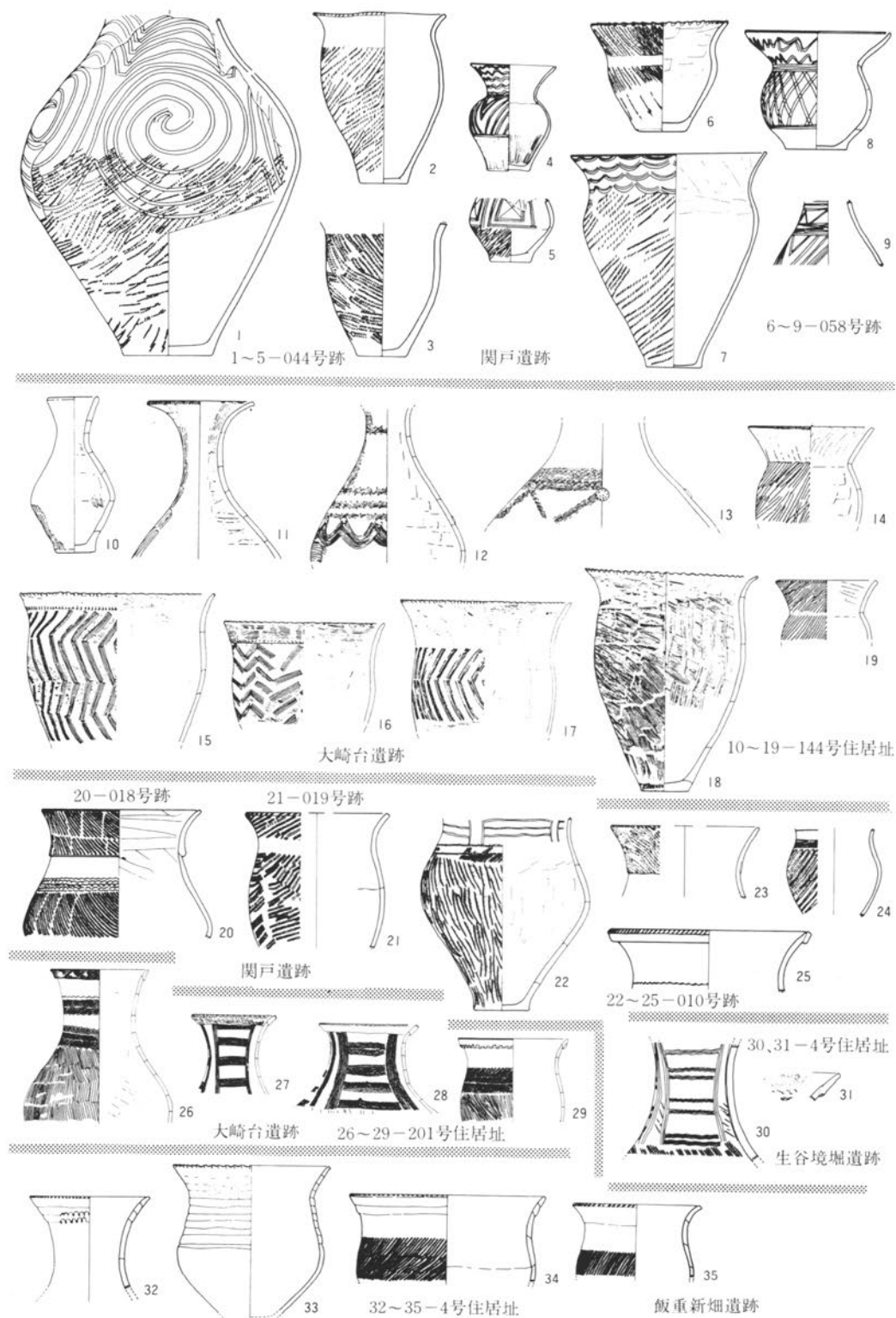
**入ノ台第2遺跡**（新井 1990） 軽沢遺跡より約2km北寄りに位置する。道路幅の調査であり、検出された住居跡も2軒と少ないが、破片を含めて北関東系土器が主体を占めている。

**西向井遺跡**（田川 1982） 入ノ台第2遺跡の対岸に立地する。限定された調査範囲ということもあり、4軒の住居跡のすべてが不十分な内容に終わっている。破片も含めてここでは南関東系土器が主体を占めている。実測品に乏しいものの、壺形土器は結節区画または結節、沈線併用で、甕形土器は単純また複合口縁、輪積装飾のものと様々である。入ノ台より下ることは明らかである。

**米山遺跡**（相川 1975） 前3者より北の鹿島川中流域の遺跡であるが、3個の実測資料の内2個は南関東系である。南関東系の壺形土器は口縁部と頸部に網目状擦糸文帯を施す一方、甕形土器は単なる波状口縁のナデ調整である。北関東系の甕形土器は胴部に附加条を施す以外は不明。

**大篠塚遺跡**（栗本 1971） 鹿島本流域を隔てた前記入ノ台、西向井両遺跡の対岸に位置する。小規模な集落跡ながら終末期から移行期にかけての遺跡であり、頸部無文、痕跡のみの北関東系の複合口縁甕が該期に伴う好例である。

**向原遺跡**（渋谷 1987） 有名な大崎台遺跡と谷を隔てた西側対岸に位置する。広い台地全面が調査対象地となったこともあり、集落のあり方を知る好例である。約50軒の住居跡が台地全面に散在する状態であり、後期初めの段階でいわば「散村」景観が形成されていた一つの証



第12図 印旛郡の中期末~後期初頭の土器(1/8)

左といえるが、佐倉市南部の該期既調査例の多くがやはり類似する集落内容を示すとみてよいだろう。

出土土器は少ないながらもそのほとんどが北関東系土器で占められ、大きく二つのタイプに分けることができる。一つは口縁から頸部無文で、口唇部また胴部に附加条縄文を施すもの、また一つは頸部に多条の縦区画波状文を施すもので、口縁と胴部は通例の附加条縄文である。この他全体に縄文を施す単純口縁のもの、また、胴部を縄文で飾る壺形土器もみられる。

**大崎台遺跡**(柿沼他 1985、1986) 高崎川と鹿島川の合流点を見下ろす台地上にあり、中期環濠集落の完掘例として有名な遺跡である。後期には集落は周囲に移動するが、移行期に再び集落が営まれる。北関東系土器は全く客体であり、頸部無文の単純口縁甕また十玉台式土器が移行期の南関東系土器に混じって出土する。

**六崎貴船台遺跡**(大沢 1989) 大崎台遺跡の東約1kmに位置する。中期の方形周溝墓を壊すかたちで後期の住居跡が散在する。時期的には向原とさほど変わらないが、こちらは南関東系の良好な共伴資料がある。向原出土土器との違いは、頸部装飾がみられず逆にそこが無文となることで、これに輪積みの南関東系甕形土器が伴っている。なお一部に折衷的な土器もみられる。

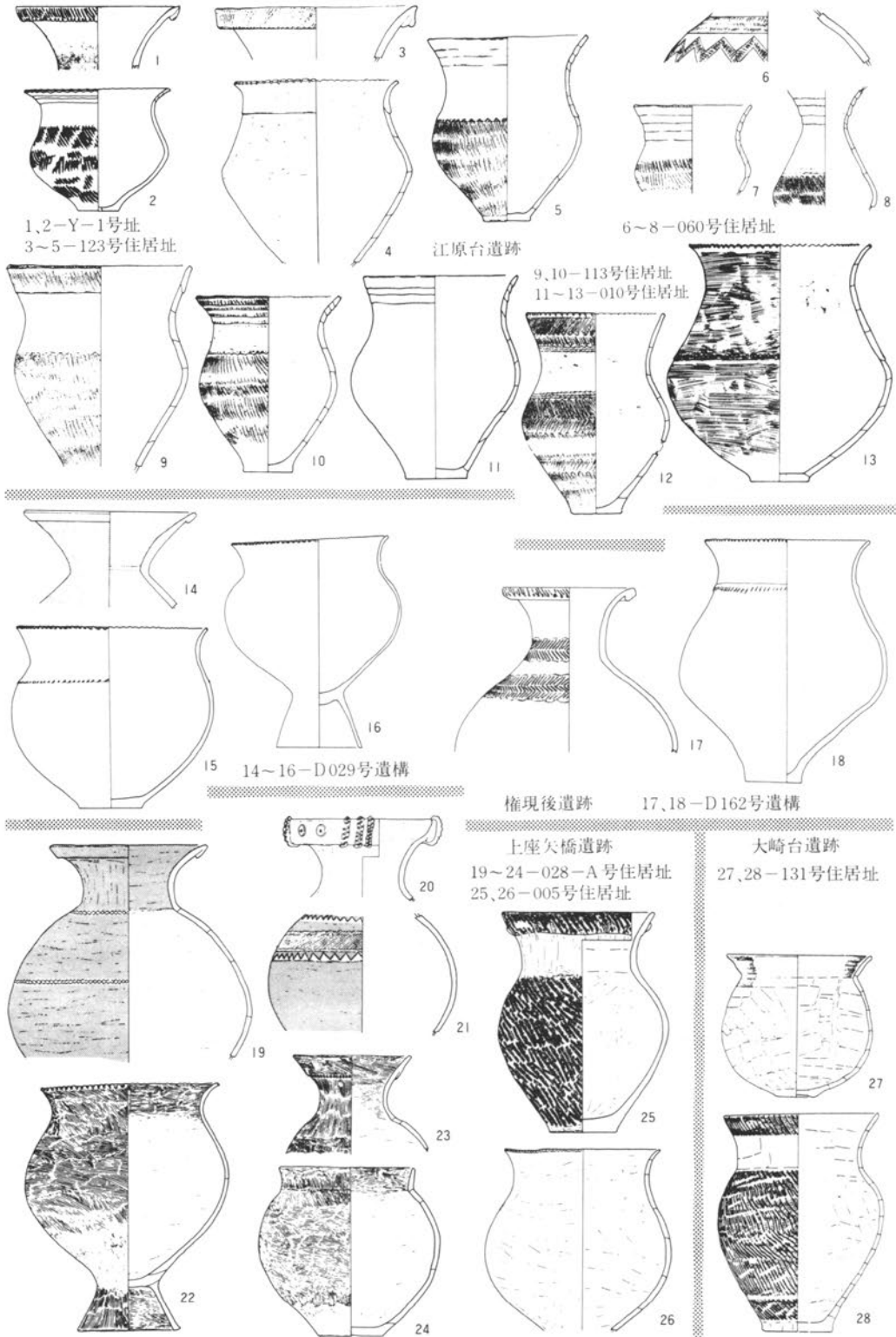
**鍋木諏訪尾余遺跡**(道沢 1984) 高崎川を隔てた六崎貴船台遺跡の対岸に位置する。やはり中期終末から移行期の住居跡が散在する。北関東系及び折衷形の土器で占められる。北関東系の土器は口縁部の刺突ないしは刻目が明瞭で、頸部には多条の縦区画波状文また波状文による格子文等を施す土器が主体を占めるが、数段の輪積甕口縁部に附加条縄文や結節文を施すものも存在する。一方、折衷形の土器は南関東系の甕形土器胴部に附加条縄文を施すものである。

**飯合作遺跡**(深沢 1978) 手繰川中流左岸に位置する。広範囲の調査例であり向原遺跡と共に当地域の集落(後期中頃から後半)のあり方を示す好例である。ただし、検出住居跡は約40軒と多いものの出土遺物のほとんどは破片である。南北両系統の土器が拮抗する。

**生谷境堀遺跡・飯重新畑遺跡**(桑原他 1974)、**間野台遺跡・古屋敷遺跡**(桑原他 1977) 近距離にあることから4者を一括した。江原台遺跡の南側に連なる遺跡群であり、いずれも小規模な集落跡である。共に後期初めから中頃に収まる遺跡で、北関東系土器を主体に南関東系また折衷形土器が若干加わる内容を示し、この内では飯重新畑遺跡が最もまとまった資料を提供する。

北関東系土器は複合口縁で、後期初めに特徴的な頸部無文、口唇部と胴部に附加条縄文を施す甕が主体をなす一方、折衷形土器は南関東系の甕形土器胴部に附加条縄文を施すものである。なお、南関東系土器は輪積甕である。なお、量としては少ないが、茨城県の後期弥生土器に特徴的な細身の器形で、口縁部下位に刺突列を有する土器がみられる。

千葉県における弥生時代後期土器の地域性について



第13図 印旛郡南部の土器(1/8)

**臼井南遺跡群** (田口他 1975、田川他 1977) 江原台遺跡の南西に隣接する遺跡群である。地形条件のゆえか小規模な後期前半 (石神第 I 地点、生谷遺跡 A・B 地点) と終末～移行期 (渡戸 B 地点、石神第 II 地点) の集落が点在する。石神第 I 地点の内容は飯重新畑遺跡とほとんど変わらないが、ここでは系統を問わず縄文帯の界線また頸部から胴部に結節文を施す例が多い。生谷遺跡の場合もほぼ同様だが、こちらは折衷形の土器が主体を占め、これに南北両者の土器が伴う。移行期の土器は大篠塚例と類似するが、ここでも北関東系はまったく客体である。

**江原台遺跡** (高田 1977、田村 1979) 印旛沼を見下ろす広い台地上先端に位置する。約 60軒の住居跡より出土した土器は後期初頭を除くほぼ前半に収まるもので、その内容は質・量共に豊富であり印旛沼南岸を代表する遺跡といってよい。折衷形及び北関東系が主体をなすが南関東系も遺構によっては優位を占める。

折衷形土器は南関東系の甕形土器胴部に附加条縄文を施すものであるが、頸部をこえて口縁部に及ぶ例も多い。なお、壺形土器の折衷形は少なくとも実測品ではみられず、これは絶対数の稀少性を示しているのであろう。北関東系土器は胴部・口縁部に附加条縄文を施し頸部無文の有段口縁甕形土器が主体をなすが、頸部に多条の縦区画波状文また格子文を施す例が破片資料に認められる。なお、僅かではあるが、多段口縁の段下位に刺突列をめぐらすもの、また、いわゆる瘤付土器も存在する。南関東系土器は上胴部有段また輪積みの平底・ナデ甕に沈線区画の壺形土器が主体をなす。この他に口唇部素縁の輪積甕も多いが、口唇部に縄文を施す点から胴部附加条例と同様、折衷形土器とみるべきか。

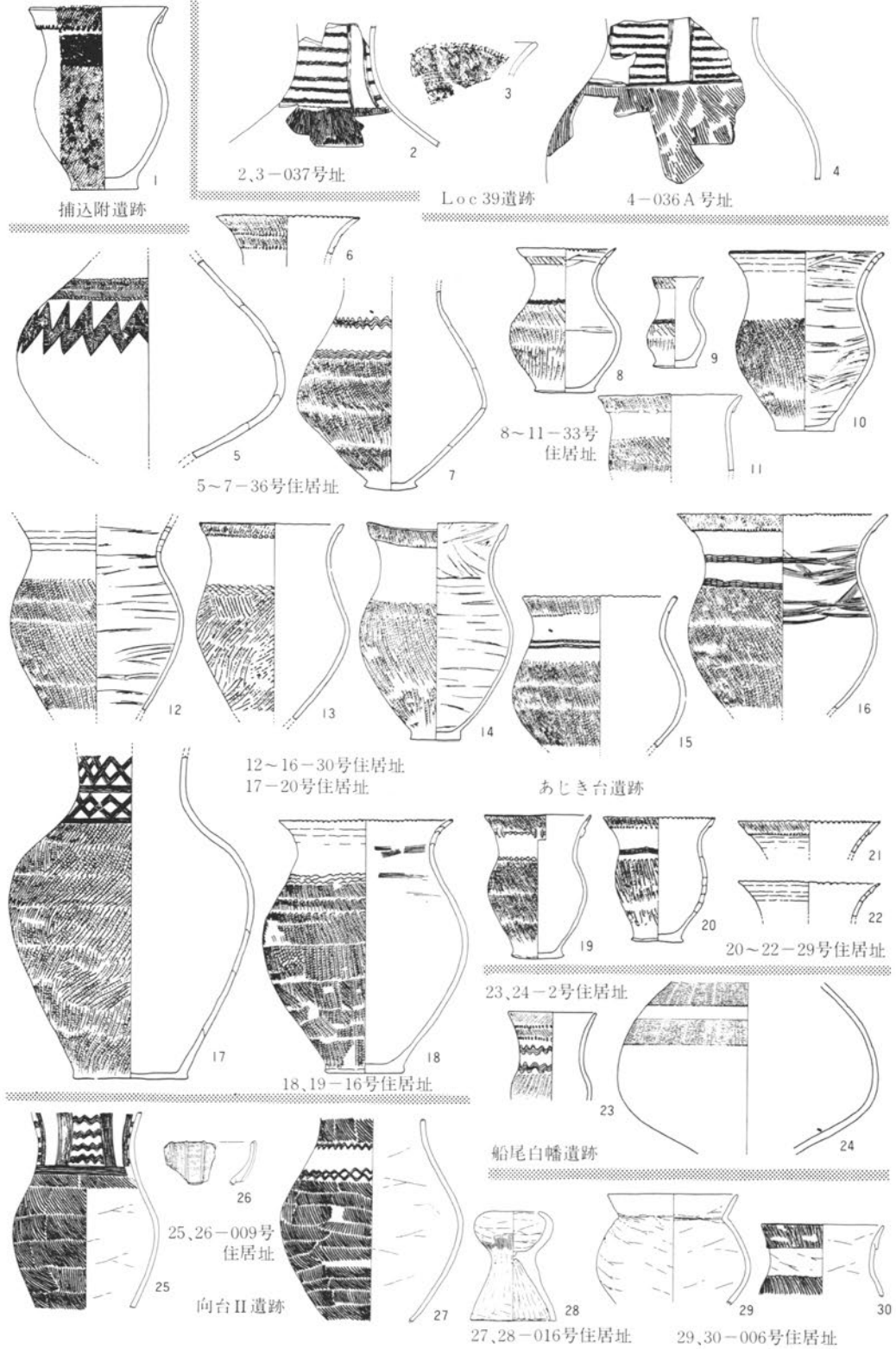
**萱橋遺跡** (米内 1976) 臼井南遺跡群と萱田遺跡群との中間に位置する。十数軒の住居跡が検出されている。時期・内容共に前記江原台遺跡とかわらない。

**上座矢橋遺跡** (末武 1986) 手繰川支流の谷奥に位置する遺跡である。終末期から移行期の集落 (26軒) としては後述する権現後遺跡とならぶ好資料を提供する。

南関東系の壺形土器は無文また有文 (口縁部に棒状浮文、胴部に結節文や鋸歯文) で複合口縁をなす一方、甕形土器は外面無装飾の伝統的な波状口縁で平底・ナデ、台付・ナデ、台付・ハケ調整の三者が主流ながら、他に伝統的なもの、新来のものなどパラエティに富んでいる。一方、北関東系土器は全く客体であり、頸部無文の瘤付土器、また、終末期に特有のタイプが伴う。

**阿蘇中学校東側遺跡** (佐藤他 1980) 新川左岸の台地上に位置する。1軒の住居跡より後期後半の良好な資料が出土した。口縁部に網目状撚糸文帯、胴部には更に縄文帯を加えた壺形土器に、上胴部有段で胴部に附加条を施す甕形土器が伴う。実測図が不鮮明で惜まれる。

**萱田地区遺跡群** (平岡 1979、加藤 1984、藤岡 1986、1987) 東葛地域と接する新川右岸の台地上に隣接する遺跡群を総称した。谷奥の遺跡群で、時期的にも後期後半から移行期ま



第14図 印旛郡北部の土器(1/8)

での集落跡であり、井戸向遺跡－権現後遺跡・ヲサル山遺跡のように推移する。終末期の良好な資料もさることながら、南北両者の並行関係また終末期に近づくとつれ南関東系土器の比重が増すことを示す好例である。以下終末期に絞って述べたい。

北関東系土器は頸部無文の複合口縁甕から終末期に特徴的な単純口縁に移り変わる傾向が認められ、それに応じて、南関東系甕形土器は上胴部有段また形式化した輪積みの平底・ナデ甕から素縁また刻目でくの字状口縁のハケ調整（台付、平底両者がある）へと変化する。

後者はまさしく移行期の土器で、権現後遺跡第IV群次いでヲサル山遺跡第II群がこれに該当する。南関東系の壺形土器はほとんど結節区画であるが、複合口縁で無文のタイプが終末期から移行期を通じてほとんど見あたらないのは注目される。なお、折衷形土器はこの段階ではほとんど認められない。

**船尾白旗遺跡**（古内 1978） 印旛沼北西に続く神崎川低地を見下ろす台地上に位置する。小規模な集落跡ながら、胴部に沈線区画の結節文帯を施す南関東系の壺形土器に、二軒屋系統（口縁・胴部に附加条を地文として、口縁部に2条の刺突列、頸部に波状文帯を施す）の甕が伴い、並行関係をみるうえで貴重。

**捕込附遺跡**（平岡他 1985） 手賀沼南岸の遺跡である。僅か2軒の住居跡を検出したのみであるが、内1軒より5個の実測資料が出土した。すべて北関東系土器である。頸部無文の刺突複合口縁甕を主体とするが、破片では頸部にも縄文を施す例が存在する。

**向台II遺跡**（末武 1991） 捕込附遺跡の北側に近接する遺跡である。終末期から移行期にかけての集落である。頸部無文またいわゆるスリット手法による多条の縦区画充填波状文等を施す複合口縁の甕を主とするが、波状文区画の壺もみられる。伴出する南関東系土器は古墳時代初頭に位置付けられるが、これは覆土上位ということもあろう。

**海老内台遺跡**（柴崎 1966、古内 1974） 向台II遺跡の東側に隣接する遺跡である。北関東系が主であるが、南関東系も存在する。何れも刺突多段口縁で、頸部は無文、多条の山形文、縄文施文のものがみられる。

**天神台遺跡**（大澤 1987） 手賀沼寄りの利根川南岸の遺跡であるが、若干内陸寄りである。内容は海老内台と類似するが、類例に乏しい南関東系の高坏やあじき台遺跡でみられる簾状文の甕の存在は注意してよい。

**竹袋天神台遺跡**（米田 1991） 地点と内容を異にするため、上記天神台遺跡と分離した。後期後半の集落（8軒検出）であり、瘤付土器の類例としては古手に属する。

**小林遺跡**（市毛 1973、渋谷 1975、青山 1987、伊藤 1984、井上 1993） 利根川縁の遺跡であり、東南にはるか印旛沼を望む。古墳また城跡の調査に伴い、住居跡や壺棺墓が検出されている。後期中頃以降、利根川南岸においても南関東系土器が組成に一定の割合を占めて



いることは注目されよう。

**平賀遺跡群** (大澤他 1985) 印旛沼北岸の遺跡群であり、一ノ台、仲ノ台両遺跡より弥生時代終末期から移行期の住居跡が検出されている。南北両系統の比率は遺構によって異なるが、覆土上位に土師器、下位に北関東系土器という出土例がよくみられることから、覆土における遺物の出土状況—レベル差の図示—が本例のような移行期の場合どうしても要求されよう。

まず仲ノ台遺跡であるが、南関東系の壺形土器は概して無文で、上胴部の文様帯はすべて結節区画である。一方、甕形土器は上胴部有段の平底・ナデ甕が主体であるが、台付・ナデ甕も存在する。北関東系土器は頸部無文の瘤付土器が伴っている。一ノ台遺跡の場合、北関東系の頸部無文で複合また単純口縁甕を主体に、頸部2条櫛歯による横走山形や縦走文また多条櫛歯によるスリット手法の縦区画充填文の甕もみられる。面白いことに同一遺構内で明確な土師器の出土も多く、それゆえに上記のような作業が要求されよう。

**あじき台遺跡** (浜田他 1983) 印旛沼と利根川の接点に位置する遺跡である。痩せ尾根上に展開する小規模な集落跡(約20軒)ながら、二軒屋系の土器が多くみられる。北関東系土器は口唇部波状(原体また工具による押捺)で口縁部に1条から2条の刺突列を施し、頸部は籐状文または無文の甕が主体を占めるが、無文の場合も縄文帯との区画に結節文を用いる例が多い。なお、胴部に附加条縄文を施す頸部多段の輪積甕もすくなく存在するが、そのあり方は佐倉地方の類似品と様相を異にし、単なる折衷形とも思われない。高坏形また壺形土器の良好な遺存品も注目される。南関東系土器は微量で、結節また沈線区画の羽状縄文帯(後者は山形)の壺形土器を挙げる程度である。

**北大台遺跡** (小川 1974) 詳細不明。十王台系の完形土器が出土する。

**その他** 当郡は70年代後半より開発ラッシュを迎えたためか、調査例も多く県内では君津、市原と並んで最も資料の充実した地域といえる。しかし、唯一成田市域のみは例外(上記の他に『成田市史』所収の遺跡(白石 1980)や桐ヶ崎遺跡(宇佐見 1985)等がある)で今後の課題といえよう。

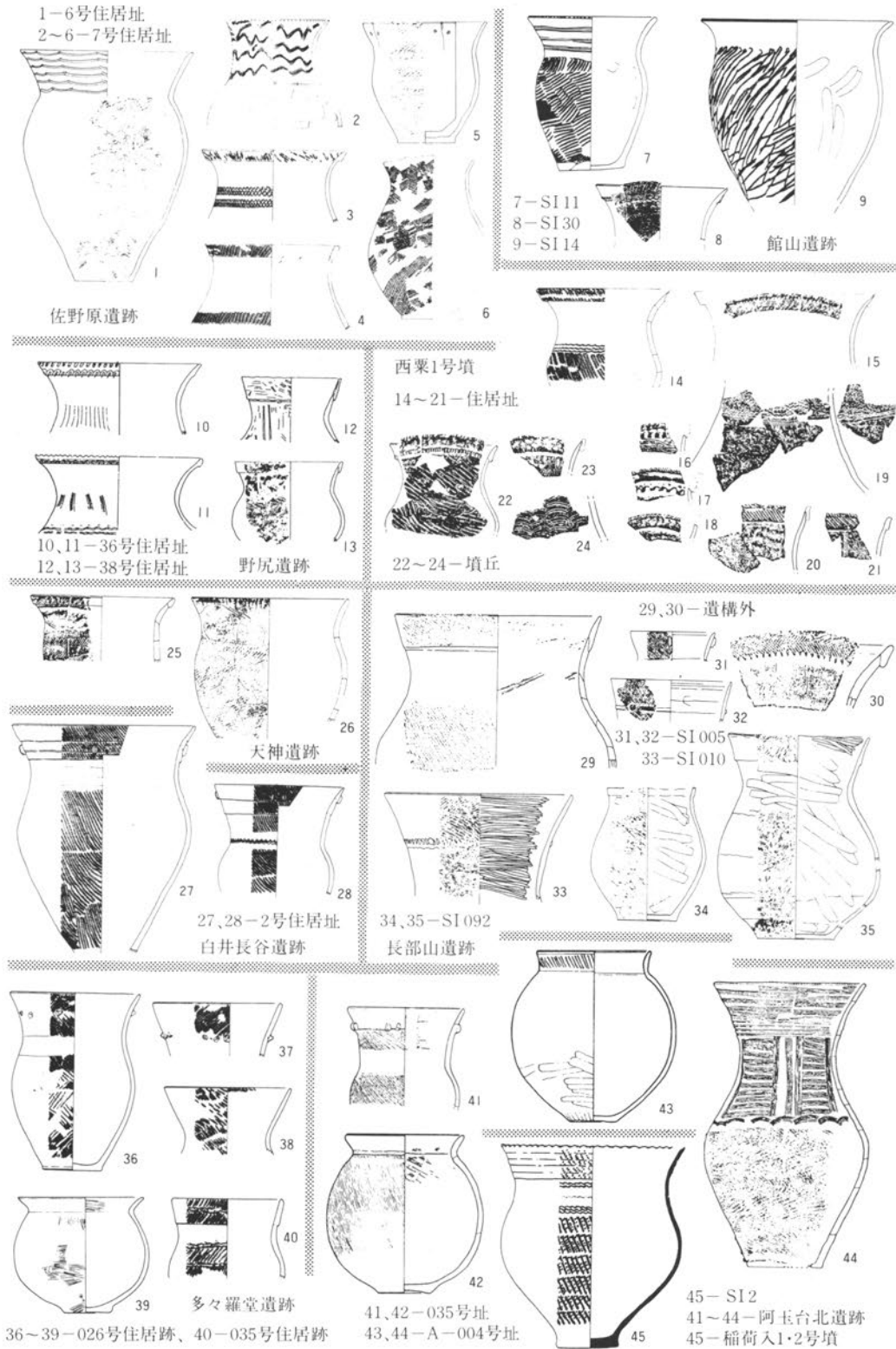
#### (10) 香取郡

千葉県北東端の地域であり、茨城県の影響が色濃く感じられる地域である。

**成井鶴ヶ峰遺跡** (伊場 1988) 尾羽根川上流右岸の台地上に位置する。小規模な調査範囲ながら終末期(7軒の住居跡)の1軒よりまとまった資料が出土する。頸部の界線に結節文を多用し、口縁部上位に縄文を用いず、無文帯や数ヶの縦長瘤または押圧列を施すものが主体である。

**多々羅堂遺跡** (栗田 1987) 大須賀川上流の山間部に位置する。移行期から古墳時代にかけての小規模な集落跡である。主体は既に土師器にかわっているが、これに北関東系の頸部無





第15図 香取郡の土器(1/8)

文の瘤付土器が伴う。縄文は羽状構成をとるものにとらないものがある。

**長部山遺跡**（秋本 1981、江尻 1991） 利根川南岸、佐原市内から東の谷奥台地上に位置する。後期後半から終末期の遺跡である。南関東系の土器はほとんどみられない。頸部無文のもの、口唇部押捺のもの、貼瘤を有するもの、口縁部に羽状縄文を施し1条の押圧隆起帯を境に波状文を充填するもの等バラエティに富んでいる。

**館山遺跡**（越川 1992） 大須賀川の中流域左岸の台地上に立地する。約20軒の住居跡が検出されているが、遺物量は少ない。注目されるのは、中期末から後期初頭の遺物がみられることで、本郡西部における該期の貴重な例である。また、終末期の瘤付土器もみられる。

**阿玉台北遺跡**（矢戸 1975） 利根川に流れ込む黒部川中流右岸に位置する。終末期から移行期の資料としてみるべきものがある。北関東系土器は頸部と口縁部上位無文で縄文帯との接点に2ヶ1単位の瘤付きのもの、または単に附加条縄文を全面に荒く施すものなどがある。ここでも移行期における北関東系は客体である。1点明瞭な十王台式土器がみられる。

**白井長作遺跡**（平野 1988） 阿玉台北遺跡の対岸に位置する。極めて限定された調査ながら1軒の住居跡より北関東系甕形土器の好資料が出土する。口縁部多段（2～3段）で頸部は無文ないしは波状文、瘤付（2ヶ1単位）である。

**稲花入1・2号墳**（村山 1992） 阿玉台北遺跡の南側に近接する遺跡である。墳丘下より2軒の移行期の住居跡が検出されている。遺物の内、波状口縁で輪積痕を有する土器は当地終末期に特有の結節区画の附加条縄文帯が施され、これは折衷形としてよいのであろうか。

**高部宮ノ前遺跡**（小宮 1984） 利根川を平野越しにのぞむ台地上に立地する。1軒の住居跡床面より複合口縁、頸部無文で口唇部に原体押捺、胴部附加条縄文帯との境界に結節文帯を施す土器が出土する。覆土中は明らかに移行期の南関東系土器で占められ、この期にしばしばみられる現象である。

**野尻遺跡**（牛房 1978） 利根川河口を東に望む台地上に立地する。検出された住居跡は約10軒にすぎないが、類例の少ない当地にあつては貴重である。後期初め頃に位置付けられるかと思われるが、出土土器の実測また拓影図が簡略また不鮮明であり、惜しまれる。

**西粟1号墳**（青木 1989） 野尻遺跡より若干河口寄りに位置する。古墳墳丘また墳丘下の住居跡より後期初頭（～前半）のまとまった北関東系土器が出土する。その主体は頸部無文の複合口縁の甕であるが、頸部に波状文、連弧文を施すもの、口縁下端に刺突を施すものも多い。また、東寺山石神例と同様な特徴的な浅鉢型土器もみられる。

**佐野原遺跡**（館野 1974） 屏風ヶ浦に面する遺跡である。中期末～後期初頭の完形・実測遺物がみられる。とりわけ、5本櫛歯による波状文の土器に頸部無文の複合口縁甕が伴う点は注目され、後者が後期初頭段階に出現する好例といえよう。

その他 近年、香取郡市文化財センターの発足に伴い、集落としてまとまった調査例がみられるようになった。鶴崎天神台遺跡（住居跡14軒）、地々免遺跡（住居跡49軒）、ササノ倉遺跡（住居跡16軒）等を挙げる事ができよう。

#### 4. 南北両系統土器の地域的な流れ

以上、県内を旧郡単位に便宜上分けて遺跡毎の様相を羅列した。次の段階として地域的なグループリングが可能かどうかまた同時に時期的な変遷についても追求したい。

安房地域は調査件数が少なく、また地域的な偏りもあって果たして如上の集成結果を有意な傾向とみなして良いかどうか不安がある。とりわけ鴨川市内の資料の稀少な点からも、である。しかし、後期初めと推定される田子台遺跡において既に台付甕が組成に参画すること、壺における沈線区画から結節区画への基本的な流れが確認されるものの、沈線区画そのものは遺存する。

君津地域は打越—マミヤク間を境界として、甕形土器の様相が異なる。すなわち、大きくみて小糸川以北では上胴部有段甕が卓越するのに対して、以南では輪積甕が卓越する。また台付甕も以北では稀薄となる。一方、壺形土器ではその差は少ないものの、後期初めから結節区画が一定の割合を占めるようである。君津地域南部と安房地域は連動しているとみてよいかもしれない。なお、北関東系土器は本郡南部までその存在が確認される。

夷隅郡の様相はよくわからない。よく引用される横山遺跡にしてもその様相はまったく上総中部のものである。ただし破片資料を観察する限りでは市原南部とそう大きな違いはないとみる。北関東系土器は夷隅川流域を南限とする。

長生郡は現在のところ国府関遺跡群の資料が目立つが、他遺跡における表採資料では沈線区画の壺形土器破片（宮ノ台遺跡しかり）も多く、そこにみられる結節区画の卓越を過大に評価すべきでない。これは時期差とみるべきであろう（後期後半から終末）。基本的に養老川右岸の様相と大差ないと考える。

市原郡は調査例が多く、後期初めから終末までほぼその様相をおうことが可能である。とりわけ中期末から後期初めにかけては近年良好な資料が相次ぎ（第6図）、後期的壺・甕形土器の初現形態が明らかになりつつある。すなわち、宮ノ台式土器の伝統的な甕に上胴部縄文帯と山形文また複合口縁の壺が伴い、次に複合口縁、輪積、上胴部有段の甕が登場する。壺は宮ノ台式土器の変化の過程で理解が可能であるが、甕は中期と後期を結びつける資料を見いだせない。この点は今後の課題であろう。

後期前半には沈線区画で縄文施文のみの複合口縁の壺に、上胴部有段また輪積甕が伴う一方、

同後半には結節区画で複合口縁上にボタン状円盤また棒状浮文を貼り付ける壺に、痕跡に近い上胴部（頸部）有段また輪積甕が伴うというのが、基本的な（というよりも場合によっては象徴的な）流れである。終末には文様に乏しい複合口縁の壺と無装飾の平底・ナデ調整甕が出現するが、これは君津地域と同じ傾向である。

千葉郡は都川を境として北関東系土器が一定の比率を占めるようになる。恐らくその北が印旛沼水系に入るためであろう。都市化が著しく、良好な資料も少ないが、東寺山石神→城の腰→田向南と推移するとみてよいであろう。

山武郡も千葉郡と同様資料は少ないが、道庭遺跡の調査結果から何点かの傾向を指摘できる。後期前半とりわけ初めにおいて北関東系土器の比重が高まること、しかもその多くは複合口縁で頸部無文となること、輪積甕が少ないことなどが挙げられよう。芝山町内のあり方からして、東金以北が南北両者土器の混交分布圏に入ることは明らかである。

東葛飾郡は東京湾岸と手賀沼また利根川水系で系統を異にする。東京湾岸は南関東系土器の分布地域であるが、もちろん北関東系土器も伴出する。南関東系の良好な資料は僅かに須和田遺跡を挙げるのみで、壺形土器におけるそのプロポーション、内傾する口縁部、頸部のボタン状円盤貼付、棒状浮文の盛行等、また、甕形土器における口縁部の形状、台付・ハケ調整甕を主とすることなど、隣接県の影響が強く感じられる。しかし、船橋周辺ではこのような傾向は顕著でなく、これは江戸川に面する条件の差によるのであろうか。

一方、松戸、沼南以北は北関東系土器の卓越地域で、複合口縁（下端に刺突の入るものとそうでないものがある）で頸部は無文また多条の横走文、山形文等を施す土器から、次第に痕跡のみの複合口縁ともいべき形態で頸部無文の土器にかわる傾向がみられる。茨城南西部から栃木県との影響を考えるべきであろう。後期後半から終末には北関東系土器の占める比率が下がる傾向がある。

印旛郡は市原、君津地域とならんで資料の蓄積著しい地域であるが、また、複雑な様相を呈する地域でもあり、まずこのような地域に調査例が集中したのはある意味で悲劇であった。

本地域は南北両系統土器の混交地域であるが、おおよそ印旛・手賀沼を境に以南では南関東系が、以北では北関東系が主体を占めるようである。しかしその割合も時期差があり、後期初めには北関東系の、中頃から後半には徐々に南関東系の影響が強まる。そして、両者の接点地域には折衷形ともいべき土器が分布するが、後期後半には影をひそめてしまう。

中期末から後期初頭にわたる変化の過程はほぼ捉えられている（関戸遺跡・大崎台→飯重新畑・生谷境堀）。ただし、大崎台144号住居址で宮ノ台式土器に伴出する足洗系の甕（第12図）が関戸遺跡010号跡また大崎台遺跡201号住居址出土の複合口縁で頸部無文またスリット手法の多条櫛描文とどうつながってゆくのか、これは竜ヶ崎市屋代遺跡でもはっきりしない。おそら

くその直前が問題となろうか。ともあれ、南関東系輪積甕の出現と呼応する現象でもある。

印旛地域における後期前半の南関東系土器は江原台遺跡の内容をもって代表されるが、後期中頃から後半に位置付けられる萱田遺跡群では次第に甕における輪積みが形式化し、結節区画の壺でほぼ占められるようになる。そして終末期の上座矢橋遺跡では在地の伝統を受け継ぐものと埼玉方面の影響が考えられるもの、そして頸部無文の北関東系土器が混在する複雑な様相を呈する。

一方、北関東系土器は印旛・手賀沼南岸においては江原台遺跡、同北岸においてはあじき台遺跡をもって、後期前半から中頃の様相を代表することができる。八千代市～佐倉市、つまり印旛南部地区における後期前半期は南北両系統土器の融合化現象ともいべき折衷形土器が顕著にみとめられる時期で、その主体は南関東系の輪積甕の胴部に附加条縄文を施すものである。南関東系の壺に附加条を施す例もあるが、全く稀少である。もちろん当該期の北関東系壺形土器そのものが当地域では同様な状況であるからこの点はそれほど大きな問題とする必要もなからう。なお、一口に折衷形といっても実は2系統あり、南関東系の壺胴部に縄文を施すものと、輪積みというより多段の口縁部を有し、口唇部は素縁また縄文押捺、多く附加条や単純な縄文を胴部や口縁部に施す土器も結構存在する。後者は吉ヶ谷式また赤井戸式と共通する手法である。

後期後半は萱田地区遺跡群に代表される。北関東系土器の相対的な比率が減少し、頸部無文の有段また単純口縁甕によってほぼ占められる。折衷形土器はこの後半の段階で姿を消すようである。終末期（移行期）はまさにその延長にあり、大崎台遺跡（十王台式土器出土）、大篠塚遺跡、上座矢橋遺跡の好例を挙げることができる。

印旛・手賀沼北岸においてはあじき台遺跡の内容が充実している。口唇部に縄文原体による押捺（波状を呈す）また口縁部に1～2条の刺突列、及び、頸部に簾状文や波状文を施す二軒屋式土器に特徴的な手法の土器が多くみられ、これに頸部無文の甕や頸部輪積みで胴部に附加状縄文を施す土器が加わる。また瘤付土器も存在する。後期後半はまとまった資料を欠くが、第14図に船尾白幡例を挙げておく。終末期は単純またわずかに一段を有する口縁で頸部無文の甕の他に、多条櫛歯によるスリット手法の縦区画充填波状文の土器がみられる（向台II遺跡、一ノ台遺跡等）。櫛歯の本数の多いことから後期初めの段階と同一視できないが、これは那珂川下流域の系統であろうか。

香取郡は北東部と南西部で若干様相を異にする。しかし、そのあり方は印旛郡東部の延長線上の香取地域に茨城県東部の土器が太平洋岸沿いに南下した結果とみるべきである。つまり、北東部は千葉県北部の土器に茨城県北東部の土器が直接流入あるいはその影響下に成立した土器が混在し、この点については既に古内氏の指摘がある（古内 1991）。中期末における阿玉台

北遺跡の土器棺、西粟1号墳における後期初めの土器、さらに下って山武郡の道庭遺跡までこの種の土器が及んでいる。しかし、主流をなすのは頸部無文の複合口縁甕で、多段の有段口縁また単純口縁で頸部無文の甕がとりわけ終末期に顕著である。瘤付土器の類例も多く、土浦市周辺の上稲吉式土器と類似する（同一ではない）。

南関東系土器は後期の中頃以降、本郡北部でも破片での検出例が増えるが逆転することはなく、移行期から古墳時代を迎える。折衷形土器は明瞭でなく、白井長作遺跡出土の多段有段口縁のあり方も本県に系譜を求めにくい。

## 5. まとめ

まず、今まで述べたことを箇条書きのまとめにしたうえで、地域差—それは畢竟既型式との関係になるが—の有無について総括をしたい。

### 南関東系土器

1、甕形土器は波状口縁の平底・ナデ調整甕が全県的に分布するが、輪積甕は君津南部から安房地域に、輪積、上胴部有段（多くは刺突を伴う）甕は君津北部～夷隅以北に主体的に分布する。しかし、下総では概して上胴部有段例が卓越する。なお、台付・ナデ調整甕は東京湾岸また東葛飾から印旛西部において認められるものの、客体である。

2、壺形土器は複合口縁で頸部から上胴部に一～数単位の縄文帯また縄文帯と山形文あるいは幾何学状文様を施すものであるが、文様帯の区画は沈線区画から結節区画という流れが認められる。ただし、結節区画そのものは後期初めからあり、必ずしも時期決定の根拠とはなりえない。

### 北関東系土器

1、北関東系土器は後期に至り、壺と甕の分離が不明瞭な単一器形となるが、広口壺とよんでよいもの、また、若干ながら壺形土器も存在し、利根川南岸に近づくにつれ器種のバラエティが強まる傾向がある。その理解については系統と時期差の把握が鍵となる。

2、後期初めに広く複合口縁甕—しばしば頸部に多条櫛描文を伴う—の成立（長岡系）をみたが、その後は複合口縁で頸部無文、縄文は斜縄文で2条附加の附加条縄文（頸部と境界に多く結節また結束文を用いる）を施す長岡系千葉タイプとでも称すべき土器が主体となるが、あじき台タイプ（二軒屋系）も後期前半からほぼ全県的に分布し、とりわけ東葛～印旛にかけての地域ではその影響が顕著である。次いで終末期には両系統の退嬰化した土器に特徴的な瘤付の上稲吉式（類似）土器また希に十王台式土器が混在する。後期後半以降、遺跡に占める北関東系土器の比率は次第に低下するものの、古墳時代初頭まで確実に残存する。



例言

1. きわめて大まかな地域ごとの土器の分布と変遷を示した。
2. 各地域の上下関係は必ずしも一律に対応しない。
3. 上総地域は、本来は市原（村田川、養老川流域）、君津北部（小櫃川流域）、長生・夷隅（外房）と分けて図示すべきであるが、ここでは草刈遺跡をもって代表させた。
4. 東葛地域の南関東系土器は隣接する他県の影響が認められ、本来図示すべきであるが割愛した。

第16図 房総の弥生土器の分布と推移



3、折衷形土器（南関東系の甕胴部に附加条縄文を施す）については、中期末から後期初めの北関東系土器の南下に伴い、主に印旛地域南部に生まれたものであり、その性格ゆえか後期後半にはほぼ姿を消すに至る。

#### 地域差の実態

このように、本県の後期弥生土器は確かに上記のような地域差が存在する。それは大きく見て下記の4地域に大別できよう。

- ①東葛北部～香取郡－北関東系土器の分布地域ながら、その様相の違いからほぼ印旛郡を境として東西に小分割できる。
- ②東葛南部～印旛南部・千葉北部～山武郡－北関東系土器、南関東系土器(③地域と大略同)、折衷形土器三者の混在地域
- ③千葉南部、市原、君津北部、長生、夷隅郡－南関東系土器の分布地域、その様相は本県を代表する
- ④君津南部、安房郡－南関東系土器の分布地域ながら、対岸の三浦、鎌倉地域とその様相を同じくする。

この地域差は既型式とどう対応するのであろうか。南関東の後期弥生土器については杉原荘介氏の古典的な業績（久ヶ原－弥生町－前野町）がある。その問題点については既に出尽くした感があり、ここで再度述べるまでもない。本県についてみれば、後期前半における③、④地域が僅かに該当する要素を有しているとはいえ（本県の中から従来の編年に対する疑問の声があがらなかったのはまさしくその結果であろう）、異なる点もある（結節区画の存在等）。それでも、杉原編年を生かすというのであれば、③、④地域の後期後半については別型式を用意する必要がある。④地域における大村直氏の「鴨居上ノ台式」（大村 1985）はまさしく一つの対案であるが、一方、該期③地域が課題として残る。

一方、北関東系土器については、古くは長岡式・磐船山式（東中根）－十王台式という編年が考えられたが、現在では那珂川、恋瀬川、利根川下流域というように小地域ごとの編年案（観）が出されている。茨城県南西部での状況がいまひとつ明瞭でないのが惜しまれるが、このような地域差が隣接する本県に持ち越されていることは容易に推察できよう。本県の北関東系土器もいづれは系列ごとに無理なく整理される日がこようが、そこにおいて印旛・手賀沼系式はもちろん、「臼井南式」も解体されるはずである。むしろ折衷形土器の様相、あるいは後期後半以降本県北部において徐々に北関東系土器の割合が低下する一方、十王台式土器をはじめとした終末期の北関東系土器が広く本県に搬入されている現象をどうとらえたらよいのか。そこにこそ、本稿のような基礎的作業の価値があると信じる。



## 引用文献

## 1. 総合別

## 南関東系

- 菊池義次他 1954 『田子台遺跡』 早稲田大学考古学研究室
- 柿沼修平他 1979 『土字』 日本文化財研究所
- 比田井克人 1981 「古墳出現前段階の様相について」 『考古学基礎論』 3
- 石坂敏郎 1984 「南関東における後期弥生土器の諸相」 早稲田大学大学院『文学研究科紀要』別冊第11集
- 大村直・菊池健一 1984 「久ヶ原式と弥生町式—南関東における弥生時代後期の諸様相（予報）」 『史館』第  
十六号
- 笹森紀巳子 1984 「久ヶ原式から弥生町式へ—壺形土器の文様を中心に—」 『土曜考古』 第9号
- 笹森紀巳子 1985 「久ヶ原式期の住居と集落」 『古代探叢』 II 早稲田大学出版部
- 小川良祐他 1975 「大宮公園内遺跡発掘調査報告」 『紀要』 2 埼玉県立博物館
- 小出輝雄 1986 「弥生時代末期から古墳時代前期にかかる土器群の検討」 『土曜考古』 第11号
- 小出輝雄 1987 「埼玉県における弥生町式土器」 『埼玉の考古学』 柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委  
員会
- 西口正純 1991 「大宮台地の弥生時代後期土器様相—浦和・大宮・与野市を中心として」 『埼玉考古学論集』  
(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小金井靖 1985 「南関東における弥生時代後期土器の一視点」 『南総考古 I』
- 林原利明 1988 「考古学的にみた安房地方—千葉県安房郡千倉町における調査の成果—」 『東洋大学文学部紀  
要』 史学科篇
- 加藤修司 1992 「千葉県における後期以降の弥生土器の編年観」 『奈和』 第30号
- 池田 治 1991 「弥生後期の甕の地域性」 『青山考古』 第9号
- 松本 完 1993 「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」 『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文  
集』
- 小高春雄 1986 「北関東系土器の様相と性格」 『研究紀要』 10 (財) 千葉県文化財センター
- 北関東系
- 菊池義次 1961 「印旛・手賀沼周辺地域の弥生文化」 『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』 本編 千葉県  
教育委員会
- (財) 茨城県教育財団弥生時代研究班 1992~1994 「茨城県後期弥生土器編年の検討(1)~(3)」 『研究ノー  
ト』 創刊号~3号
- 海老沢稔他 1993 『原田北遺跡II 原田西遺跡』 茨城県教育財団文化財調査報告第80集
- 江幡良夫 1994 『原田北遺跡II 西原遺跡』 茨城県教育財団文化財調査報告第85集
- 小玉秀成 1994 「東関東地方における後期弥生土器の成立過程」 『史館』 第25号
- 大木紳一郎 1991 「赤井戸式土器の祖型について」 『研究紀要』 8 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 茨城県立歴史館編 1991 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県
- 柿沼修平他 1984 「房総弥生式土器の研究」 『日本考古学研究所集報IV』 日本考古学研究所
- 古内 茂 1991 「利根川下流域の弥生文化」 『調査研究報告』 第4号 千葉県立大利根博物館

## 2. 地域別

### 安房郡

- 玉口時雄他 1978 『健田遺跡』 朝夷地区教育委員会  
玉口時雄他 1981 「房総半島南半部における弥生文化の研究」『東洋大学文学部紀要』史学科篇6  
玉口時雄他 1981 『永野台』 東洋大学未来考古学研究会  
小金井靖他 1980 『健田遺跡発掘調査概報』 考古学資料刊行会  
小金井靖 1985 「南関東における弥生時代後期土器の一視点」『南総考古Ⅰ』  
川瀬智晴他 1982 『千倉町埋蔵文化財調査報告書—健田遺跡関連第6次調査—』  
菊池義次他 1954 『田子台遺跡』 早稲田大学考古学研究室  
市毛 勲他 1978 『安房国分寺第二次調査概報』  
市毛 勲他 1979 『安房国分寺第三次調査概報』  
林原利明 1988 「考古学的にみた安房地方—千葉県安房郡千倉町における調査の成果—」『東洋大学文学部紀要』史学科篇  
対馬郁夫 1957 「明鐘崎の海触洞窟」 『海』2号

### 君津郡

- 平野雅之 1987 『富士見台遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
大原正義 1983 『岩坂大台遺跡』 (財)千葉県文化財センター  
山下亮介 1984 『東天王台遺跡』 墨田区教育委員会  
野中 徹 1981 『大明神原遺跡発掘調査報告書』 大明神原遺跡発掘調査団  
酒巻忠文 1992 『打越遺跡・神明山遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
平野雅之 1986 『本名輪遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
杉山林継他 1977 『請西』 請西遺跡調査会  
(財)君津都市文化財センター 1989~1993 「請西遺跡群」 『年報』No.7~10  
小高幸男 1992 『天神前遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
小高春雄他 1993 『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』 (財)千葉県文化財センター  
戸倉茂行 1986 『高千穂古墳群』 (財)君津都市文化財センター  
小沢 洋 1985 『境遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
牛房茂行 1985 『境No.2遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
能城秀喜 1989 『境遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
小石 誠 1984 『金井崎遺跡発掘調査報告書』(財)君津都市文化財センター  
野中 徹 1982 『富津市史 通史』 富津市史編纂委員会  
小高幸男 1988 『宮脇遺跡』 (財)君津都市文化財センター  
神野 信 1992 「木更津市芝野遺跡」 『千葉県文化財センター年報No.17』

### 夷隅郡

- 矢吹俊男他 1978 『大多喜町横山遺跡発掘調査報告書』  
 立教大学考古学研究会 1978 『夷隅のむかし』 6号  
 江沢中葉 1963 「夷隅町引田峯越台遺跡調査概報」 『総南文化』 1号  
 立教大学考古学研究会 1983 『上総国・中滝城址Ⅰ』  
 加藤晋平 1991 「原始・古代」 『大原町史』 大原町
- 長生郡
- 久我春雄他 1977 「原始・古代」 『睦沢村史』 睦沢町  
 小久貫隆史 1993 『国府関遺跡群』 (財)長生郡市文化財センター  
 三浦和信 1990 『岩川・今泉遺跡』 (財)長生郡市文化財センター  
 戸田哲也 1977 「町内出土の各種遺物」 『長柄町史』 長柄町
- 市原郡
- 藤崎芳樹 1982 『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』 (財)千葉県文化財センター  
 上條朝宏他 1978 『千葉・南総中学遺跡』 駒沢大学考古学研究室  
 柿沼修平他 1979 『土宇』 日本文化財研究所  
 木對和紀 1992 『市原市椎津茶の木遺跡』 (財)市原市文化財センター  
 高橋康男 1990 『市原市姉崎東原遺跡』 (財)市原市文化財センター  
 越川敏夫他 1984 『原遺跡』 原遺跡調査会  
 武部喜充 1983 『毛尻遺跡調査報告書』 毛尻遺跡調査会  
 山口直樹 1984 『小田部新地遺跡』 (財)市原市文化財センター  
 大村 直 1991 『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』 (財)市原市文化財センター  
 半田堅三 1976 『武士遺跡』 武士遺跡発掘調査団  
 (財)千葉県文化財センター 1989 『(財)千葉県文化財センター年報No14』  
 菊池義次他 1976 『上総国分寺台発掘調査概要Ⅱ』 上総国分寺台発掘調査団  
 鈴木英啓他 1979 『唐崎台』 唐崎台遺跡発掘調査団  
 近藤 敏 1986 「山田橋表通遺跡」 『市原市文化財センター年報』 昭和60年度 (財)市原市文化財センター  
 阪田正一他 1974 『市原市大厩遺跡』 房総考古資料刊行会  
 齋木 勝他 1974 『市原市菊間遺跡』 (財)千葉県都市公社  
 小久貫隆史 1983 『千原台ニュータウンⅡ』 (財)千葉県文化財センター  
 高田 博 1986 『千原台ニュータウンⅢ』 (財)千葉県文化財センター  
 (財)千葉県文化財センター 1989~1993 「草刈遺跡」 『(財)千葉県文化財センター年報No14~18』  
 金丸 誠 1984 『市原市雪解沢遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 千葉郡
- 田川 良 1984 「田向南遺跡発掘調査報告」 『千葉市文化財調査報告書 第8集』

- 菊池慎太郎 1979 『千葉市城の腰遺跡』 (財) 千葉県文化財センター  
 深沢克友他 1977 『東寺山石神遺跡』 (財) 千葉県文化財センター

山武郡

- 小高春雄他 1983 『道庭遺跡』第1分冊 道庭遺跡調査会  
 小高春雄 1992 「原始・古代」 『蓮沼村史』 蓮沼村  
 川戸 彰 1956 「東金市発見の弥生式土器」 『國學院大學考古学会会報』第43号  
 松井義郎 1975 『板附古墳群』 山武考古学研究会  
 戸村正巳 1992 「芝山町における弥生時代について」 『芝山町史』資料集1第2分冊 芝山町

東葛飾郡

- 松浦有一郎 1972 『夏見大塚遺跡』 船橋市教育委員会  
 松浦有一郎 1975 『夏見大塚遺跡』 船橋市教育委員会  
 米沢容一他 1975 『夏見大塚遺跡』 夏見大塚遺跡調査団  
 石井 穂他 1976 『夏見台』 夏見台遺跡第3次発掘調査団  
 杉原荘介 1971 「原始農耕文化」 『市川市史』第一巻 市川市  
 熊野正也 1965 「須和田遺跡出土の一弥生式土器について」 『考古学集刊』第3巻第2号  
 熊野正也 1976 「杉ノ木台遺跡出土の弥生式土器について」 『史館』第七号  
 熊野正也 1970 『殿台遺跡』 市川市教育委員会  
 関根孝夫他 1974 『諏訪原遺跡』 松戸市教育委員会  
 関根孝夫 1961 「弥生式時代の松戸」 『松戸市史』 松戸市  
 飯塚博和 1981 『柏市笹原遺跡』 柏市教育委員会  
 飯塚博和 1983 「寺後遺跡」 『埋蔵文化財調査概報Ⅰ』 野田市郷土博物館  
 古宮隆信他 1976 『中馬場遺跡第三次発掘調査報告書』 柏市教育委員会  
 三上嘉徳他 1966 「千葉県海老内台遺跡群の調査報告」 『下総考古学』2  
 古内 茂他 1974 『柏市鴻ノ巣遺跡』 千葉県都市公社  
 今泉 潔 1987 『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』 (財) 千葉県文化財センター  
 菊池義次 1961 「印旛・手賀沼周辺地域の弥生文化」 『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』本編 千葉県教育委員会  
 坂詰秀一・関俊彦 1963 「中和倉寒風遺跡」 『松戸市郷土資料集』第一集

印旛郡

- 千田利明他 1986 「軽沢遺跡」 『四街道市吉岡遺跡群』 吉岡遺跡群調査会  
 新井和之 1990 『入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』 四街道市教育委員会  
 田川 良 1982 「西向井遺跡」 『北総線』 東京電力北総線遺跡調査会  
 相川日出雄 1975 「亀崎、米山遺跡」 『四街道町の文化財』第2号  
 栗本佳弘 1971 『埋蔵文化財調査報告』 東関東自動車道遺跡調査団

- 渋谷興平 1987 「向原遺跡」 『寺崎遺跡群発掘調査報告書』 佐倉市寺崎遺跡群調査会  
 渋谷興平 1975 『小林古墳群遺跡』 小林古墳群発掘調査団  
 柿沼修平他 1985 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会  
 柿沼修平他 1986 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅱ』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会  
 大澤 孝 1989 『六崎貴船台遺跡発掘調査報告書』 (財)印旛都市文化財センター  
 大澤 孝 1978 『天神台遺跡発掘調査報告書』 (財)印旛都市文化財センター  
 大澤 孝他 1985 『平賀』 平賀遺跡群発掘調査会  
 道沢 明 1984 『鍋木諏訪尾余遺跡』 鍋木諏訪尾余遺跡調査会  
 深沢克友 1984 『佐倉市飯合作遺跡』 (財)千葉県文化財センター  
 桑原 護他 1974 『飯重』 佐倉市教育委員会  
 桑原 護他 1977 『間野台、古屋敷』 間野台、古屋敷遺跡調査団  
 熊野正也他 1975 『臼井南』 佐倉市教育委員会  
 熊野正也他 1976 『臼井南一石神Ⅲ地点発掘調査報告書一』 佐倉市教育委員会  
 田川 良他 1977 『生谷』 生谷遺跡発掘調査団  
 高田 博 1977 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 (財)千葉県文化財センター  
 田村言行 1979 『江原台』 江原台第1遺跡発掘調査団  
 米内邦雄 1976 『佐倉市埋蔵文化財報告(2)』 志津西ノ台遺跡調査団  
 末武直則 1986 『上座矢橋遺跡』 印旛考古資料刊行会  
 末武直則 1991 『向台Ⅱ遺跡』 (財)印旛都市文化財センター  
 佐藤克巳他 1980 『阿蘇中学校東側遺跡』 八千代市遺跡調査会  
 平岡和夫他 1979 『萱田町川崎山遺跡』 八千代市遺跡調査会  
 平岡和夫他 1985 『寺向・捕込附遺跡』 山武考古学研究所  
 加藤修司 1984 『八千代市権現後遺跡』 (財)千葉県文化財センター  
 藤岡孝司 1986 『八千代市井戸向遺跡』 (財)千葉県文化財センター  
 藤岡孝司 1987 『八千代市白幡前遺跡』 (財)千葉県文化財センター  
 古内 茂 1978 『船尾白幡遺跡』 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅳ』  
 古内 茂 1974 『印旛地区の弥生時代遺跡』 『なわ』第13号  
 芝崎 孝 1966 『弥生時代の竪穴住居址』 『下総考古学』2  
 市毛 勲 1973 『下総鶴塚古墳の調査概報』 下総鶴塚古墳調査団  
 青山 博 1987 『小林遺跡発掘調査報告書』 小林遺跡調査会  
 伊藤一男 1984 『印西小林城』 印西町小林城跡調査会  
 浜田晋介 1983 『あじき台遺跡』 あじき台遺跡調査団  
 喜多圭介 1989 『長田和田遺跡』 (財)印旛都市文化財センター  
 小川和博 1974 『成田市の弥生時代遺跡の分布について』 『なわ』第13号  
 矢戸三男 1900 『柏市鴻ノ巣遺跡』 房総考古資料刊行会  
 白石竹雄 1980 『原始農耕時代の成田』 『成田市史』原始古代編 成田市  
 宇佐美義春 1985 『桐ヶ崎遺跡』 桐ヶ崎遺跡調査会

香取郡

- 伊場彰一 1988 『成井鶴ヶ峰遺跡』 下総町遺跡調査会  
栗田則久 1987 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI』 (財)千葉県文化財センター  
秋本健一 1981 『佐原市長部山遺跡』 長部山遺跡発掘調査会  
江尻和正 1991 『長部山遺跡』(財)香取郡市文化財センター  
越川敏夫 1992 『館山遺跡』(財)香取郡市文化財センター  
矢戸三男他 1975 『阿玉台北遺跡』 房総考古資料刊行会  
平野 功 1988 『小見川町内遺跡群発掘調査報告書』 小見川町教育委員会  
村山好文 1992 『神代夏方遺跡、稻荷入砦跡、稻荷入1号塚・2号塚』 (財)香取郡市文化財センター  
小宮 孟 1990 『東総用水』 (財)千葉県文化財センター  
牛房茂行 1978 『銚子市野尻遺跡』 銚子市教育委員会  
青木幸一 1989 『西粟1号墳発掘調査報告書』 銚子市教育委員会  
青木幸一 1990 「第3章 弥生時代」 『下総町史』原始古代中世篇 下総町  
館野 孝 1974 『千葉県銚子市佐野原遺跡発掘調査概報』 銚子市教育委員会  
(財)香取郡市文化財センター 1991、1993 『事業報告』I、II

(財団法人千葉県文化財センター成田調査事務所)